

ひとの健やかでこころ豊かな未来を実現するために

ひと・健康・未来

vol. **38**

2024. 11

特集 ひと・健康・未来シンポジウム 2024 京都

記憶に残し、未来を拓く ー共に生きるためにー

スペシャルインタビュー 未来を拓く～

気候変動と生物多様性問題にシステム論と政策科学で挑戦

森田 香菜子 慶應義塾大学 経済学部 准教授

第 59 回 未来研究会

「風景の未来」風景は誰のものか ー京都の桜、紅葉と三山の松ー

小野 芳朗 京都工芸繊維大学名誉教授



ひと・健康・未来

第 38 号 2024 年 11 月発行

発行 公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団
〒 604-8171 京都市中京区烏丸通御池下ル虎屋町 566-1
井門明治安田生命ビル 6F
TEL & FAX 075-212-1854

印刷所 株式会社あおぞら印刷
〒 604-8431 京都市中京区西ノ京原町 15
TEL 075-813-3350 FAX 075-813-3331

公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団では、ホームページを運営し事業の広報活動を展開しています。研究助成公募や市民公開講座に関する内容はホームページをご確認ください。

ホームページアドレス

<https://www.jnhf.or.jp/>



04

特集

第30回 ひと・健康・未来シンポジウム2024 京都

記憶に残し、未来を拓く — 共に生きるために —

● 源氏物語の凄さ

作家 / 精神科医

帚木蓬生

● 進化と文明のミスマッチから見た未来社会

総合地球環境学研究所 所長 / 京都大学名誉教授
公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 理事

山極 壽一

● 鼎談

鼎談進行

畠中 宗一
帚木 蓬生
山極 壽一

22

スペシャルインタビュー

未来を拓く

気候変動と生物多様性問題にシステム論と政策科学で挑戦

慶應義塾大学 経済学部 准教授

森田 香菜子

30

未来研究会

「風景の未来」

風景は誰のものか — 京都の桜、紅葉と三山の松 —

京都工芸繊維大学名誉教授

小野 芳朗

36

研究助成

2024年度 研究助成採用結果

37

研究助成

2025年度 研究助成の募集

38

コラム

学びの深化を愉しむ

第1回 未来研究会

公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 理事
大阪市立大学名誉教授 / 関西福祉科学大学名誉教授

畠中 宗一

39

インフォメーション・編集後記

「ひと・健康・未来シンポジウム」のご案内



表紙について

特集をテーマに、京都市立芸術大学 / 大学院の皆さんに描いていただいています。



〈作者〉

竹内 柊祐 さん 京都市立芸術大学 美術研究科ビジュアル・デザイン専攻
デジタル化に伴い記憶の外部化が進むことで、自身と外部の記憶の境界が曖昧になっている様子を表現しました。

監修 / 辰巳 明久 教授 京都市立芸術大学名誉教授 / 大阪工業大学知的財産学部 客員教授
記憶の有り様を、作者が得意とする切り紙の技法を用いて、有機的な曲線として表現した作品です。

記憶に残し、未来を拓く — 共に生きるために —

今回のシンポジウムは記憶をキーワードにしています。われわれの記憶は、加齢とともにその能力を低下させています。加えてメタバースやChatGTPなどの登場が、記憶の外部化を促進させ、われわれの記憶そのものを脆弱化させてきているのではないか。記憶の脆弱化は、身近なところでは家族の歴史、こういったものを不可視化させ、さらには災害やあるいは戦争など、深刻な記憶さえ希薄化させていきます。また、現実に向けると、われわれは今生きることに関与して過去を振り返る余裕がありません。お二人の講演から、記憶に残すことや、あるいは記憶を取り戻すことについて改めて考える機会になればと期待しております。

企画・進行
島中宗一



『源氏物語の凄さ』

NHKの大河ドラマ『光る君へ』のおかげで源氏物語は身近なものになりました。しかし源氏物語の凄さと紫式部の偉大さは、ドラマでは書き得ないでしょう。どこが凄くて偉大なのか、その秘密を探ります。

帝木 蓬生 ははきぎ ほうせい
作家／精神科医

1947年福岡県生まれ。東京大学文学部仏文科卒業後、TBSに入社し、『ロッセ歌のアルバム』『歌のグランプリ』『日曜8時笑っていただきます』のAD。2年で退社して、九州大学医学部入学。卒業後、1980年～1982年フランス政府留学生としてマルセイユとパリで研修、九大→精神科医局長を経て、八幡厚生病院に勤務し、2005年通谷メンタルクリニックを開院。2023年医院は後輩に継承し、ハーフタイム非正規の作家から現在は正規雇用フルタイム作家。

『進化と文明のミスマッチから見た未来社会』

人類の進化を遡ってみると、人類は弱みを強みに変えて発展してきたことがわかる。文明は時間を止めて効率と生産性ばかり追求したので地球環境が傷んでしまった。人間の心身の記憶を取り戻し、未来を展望してみたいと思う。



山 極 壽 一 やまぎわ じゅいち

総合地球環境学研究所 所長 / 京都大学名誉教授
公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 理事

京都大学理学部卒、理学博士。京都大学霊長類研究所助手、京都大学理学研究科教授を経て、2020年まで第26代京都大学総長。人類進化論専攻。屋久島で野生ニホンザル、アフリカ各地で野生ゴリラの社会生態学的研究に従事。国際霊長類学会会長、日本学術会議会長を歴任。



企画・進行

島中宗一 はたなか むねかず

大阪市立大学名誉教授／関西福祉科学大学名誉教授
公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 理事

1951年鹿児島市生まれ。鹿児島大学教育学部、立教大学大学院社会学研究科修士課程、筑波大学大学院社会科学部博士課程を経て、沖縄キリスト教短期大学講師・助教授、中国短期大学助教授、東洋大学短期大学助教授、大阪市立大学生活科学部助教授、大阪市立大学生活科学部・大学院生活科学研究科教授、関西福祉科学大学社会福祉学部教授。2024年3月退職。日本家族社会学会、日本家族心理学会等の理事を歴任、専門は家族臨床福祉学。

源氏物語の凄さ

作家／精神科医

帚木 蓬生

ははきぎ ほうせい

大著『香子 紫式部物語』

まだ読んでおられない方もおられると思いますが、読まなくていいんです、買うだけで。5巻で1万5000円ぐらいですが、飾るのに一番いい、大竹画伯の絵がすばらしいですからね。5巻で2544ページ、厚さは17・5cmで、重さは2・7kg。新生児が2・9kgですから、もう大変な大作ですよ。私は生原稿で書きますから、4365枚。字数にして174万6000字。これをしんねりむつり（態度・性質などが陰気で、心に思うことをはつきりと言わないさま）書いたのが『香子』です。余裕のある方は買われて、ない方は図書館で借りてください。

魂の姉妹、紫式部

『源氏物語』を褒める方は多くおられますが、日本人はあんまり褒めないんじゃないでしょうか。一番褒めたのがフランス人の女流作家、マルグリット・ユルスナール（1903〜1987）です。1980年にアカデミー・フランセーズ（フランスの国立学術団体 ルイ13世統治下の1635年に宰相リシュリユーによって創

設）で最初に女性会員になった方、77歳のときです。その前に文学大賞も授与されている大変な作家で、ノーベル賞こそもらっていませんが、私は当然もらってよかったですと思います。彼女は、紫式部は私の魂の姉妹である」と、そして、中世のマルセル・ブルースト（1871〜1922）と言ったんですね。ご存じでしょうか、『失われたときを求めて』『À la recherche du temps perdu』全7編の長編小説ですかね。意識の流れをずつとしんねりむつり書く方ですよ。私、読みましたが、難しい（笑）、本当に難しく途中でやめましたけど、近代小説のはしりだったんですね。だから、そんな昔じやない。面白いことに、第一次世界大戦中の1916年3月24日に2人ともパリにいたんですね。ブルーストはフランス人ですからね。ドイツのツェッペリン飛行船がパリに爆弾を落とす、その光景を2人とも見てるんです。ブルーストはもちろんですが、藤村も本当に花火のようにきれいだ」と『エトランゼ』に書いてます。お互い知らない同士ですが、2人がパリにいたというのは、もう時代の配剤でしょう。

それから、2番目の紫式部をほめた方、これは誰かというと、ドナルド・キーンさんですよ。あの方も、アーサー・ウェイリーの英訳で読んでいます。18歳のときだったみたいですね。中世の物語だというのは、『源氏物語』には戦争の話が一つもない。ヨーロッパの中世の話は戦争ばかりで、戦争に行つて男が戦う。そんな戦いの話が全く『源氏物語』にはないということに感激したんです。それで日本文学を勉強しようとしたんですから、そこにも『源氏物語』の凄さがあります。

ものあわれ

『源氏物語』を絶賛した3番目は誰かということ、これは日本人で、本居宣長です。この人は本当に偉かった。『古事記伝』が一番の大作でしょう。しかし、『源氏物語玉の小櫛』や『紫文要領』を読むと、紫式部の『源氏物語』



『源氏物語』を本主に勉強した方ですね。私は30代の頃に学会の帰りか何かで松阪牛を食べに行こうかなと思つて松阪に寄つたんです。松阪には本居宣長の記念館がありますから。そこで展示ケースの原稿を見たときに、本当に驚きました。原稿がずらつと並んでいて、もちろん筆です。その原稿に朱筆を入れて、もう本当に原稿が真っ赤になるように別の朱筆を入れたり、またちらちらと薄いので訂正を入れたりしてらんです。人間ってこんなに勉強することができるとは、そう思ったのが本居宣長です。本当に勉強家で、職業は小児科医で、婦人科の女の人も診ていた医師なのに凄いなだつたと思いますよ。

源氏物語はミュージカル

本居宣長がさらに鋭い指摘をしたのは、『源氏物語』とは歌物語であるとした点です。というのは、『源氏物語』の中に795首の和歌が入ってるんです。小説の中に和歌を、しかも795も入れるんですからね。その和歌というのは全部、登場人物が詠んだ和歌ですから、紫式部が登場人物に成り代わつて詠んだ和歌ですよ。それを入れるというのは、これまた大変な技術でしょうね。そこを本居宣長が歌物語と言つたんですが、今で言えばミュージカルなんです。ミュージカルです、あれは。

重厚で比類のない人間描写

紫式部の人物描写というのは、三層に分けてるんですね。一つはもちろん胸中思惟というか、心中思惟というか、心の中でああではない、こうではないという堂々巡りの思惟です。Aでもない、Bでもない、Cでもないという考え。それが心中思惟、胸中思惟。そういうのをまず入れています。第二は、発言です。その発言は、周りのいろんな人とかしきたりを交えて、うそが多い。すけすけ言つたら誰かを傷つけるだろうなっていうことで、当たりさわりのない発言をする、それはうそになることが多いんです。しかし、最後に短歌でびしっと本心を言う、これが第三です。短歌というのは本心を言わないといけないように当時からなつていて、送られた人は返歌するのが礼儀ですから、びしつと言ってます。つまり人間の描写に三層構造を用いてるんです。心中思惟っていうのが、Aでもない、Bでもないですから、まるで登場人物がスローモーションに見えるんです。ああでもない、こうでもないと考え、発言するとき当たりさわ

のない嘘を言い、本当のことは最後に短歌で詠みあげるのです。この三層構造って、これはもう現代作家はできないですね。現代作家は人を書くときには、こう思っ
て、それでこう行動したって単純に書くんですが、紫式部はそうではなく、三層構造を取ったっていうこともう本当に凄い。だから、人間描写に厚みが出るんですね。

厚みが出た人物は誰か、それはまず、光源氏ですよ。あの人は、女性を手練手管にしようとして、心の中では、ごちゃごちゃ思うわけです。しんねりむつりスローモーションで思うわけです。言うときは、差しさわりのないことを言います。で、短歌で光源氏は本心を詠むわけです。そこに人間の重みが出てくるんですね。そ

れから2番目は、紫の上、あの人は、途中で女三宮が降嫁してきて、複雑な状況になりますけど、あんまり人
自分の嫉妬心とか苦しみを寄せたらいけないので、こらえて本心は言いません。そして短歌でちよつぱり本音を漏らします。こうして、紫の上は厚みのある人物になるわけです。

3番目は薫です。宇治十帖で薫というのは、もうあじやこじや考える人です。それで、うそっぽいこと言うし、でも和歌は本心。薫には厚みがあるんですね。で、あまり厚みがありすぎて何やら、何ちゅう人かわからんと思ったのが浮舟でしょう。薫と反対に匂宮は、直情的で、本音をびしつと言う人ですから、それに引かれていったっていうのが浮舟なんです。その対比が

よくわかります。あんまり人物が厚すぎて訳のわからん人物になったっていうのが薫です。その書き分けが本当にうまいと思います。

別れと再会

もう一つ、紫式部がものすごく力を入れたのは、別れです。まず生別、それから死別というのがあります。これをしんねりむつりつりと書いています。例えば、別れというと、光源氏が須磨明石に下がっていくときの別れ、それから六条御息所が伊勢神宮に下がっていく別れ、逆に光源氏が明石から京都に戻るときの別れとか、本当に別れがいっぱいできます。死別のほうは、夕顔が死ぬところもそうです。葵の上も死んでいきます。宇治十帖でも大君が死んでいきます。死ぬところを本当にしんねりむつりつり書くのが紫式部で、この芸当も現代作家はできません。もう人が死んだら、はい、死にましたぐらいいで。それから、別れのときも、はい、さいならぐらいいで。別れに力を込める現代作家は今いないでしょう。それをしんねりむつりつり、生き別れ、死別を書いて、どんな効果が出てくるかというと、再会です。例えば、空蟬が帰ってきて再会するとか、末摘花との再会とか、玉鬘が九州から戻ってきて再会するとか。再会が非常に生きてきます。そういう筆遣いをしていて、それも今の作家にはできません。

女人の哀しみを描く

ちよつと読むと『源氏物語』の主人公は光源氏だといふふうが大抵の方は思われています。しかし、紫式部が書きたかったのは女性なんです。女人のありさまを書き



たかった。紫式部が『源氏物語』を書くことと書いたのは、『蜻蛉日記』を読んでからです。『蜻蛉日記』というのは女人の哀しみを書いた日記です、藤原兼家の妻ですけど、第2か第3か第4かの妻です。その悲しみを書いた日記が『蜻蛉日記』です。ただ一人の女性の哀しみだけ

です、それは。紫式部はそうでない。『源氏物語』を見ると、25人の女性が出てくるんですね。主な女性だけで25人。そしてその25人を見事に書き分けている。それぞれの不幸をです。幸せな人っていうのは明石尼君ぐら

いでしょいか。あんまりない。哀しみを背負った女人のそれぞれの姿です。末摘花もそうでしょうし、空蟬もそうでしょうし、紫の上もそうでしょう。全部、女人の哀しみを書きたかったというのが、作品の一番の中心じゃなかったでしょう。多くの女人を書くっていうのは、大作家のシェイクスピアもできてないですから。シェイクスピアは男を書いて、女性はちよつとしか出てきません。それから中国の大抵の漢文学っていうのは男性ばかり出てきます。女性は楊貴妃とか稀です。紫式部はそうではなく、女性の哀しみ、25人をそれぞれ書き分けたというのも、凄い実力です。

誰も書かなかった『源氏物語』

『香子』の五巻というのは、紫式部はどうやって『源氏物語』を書いていったかというところを書いてるわけです。だから、『香子』は、読むと非常に役に立つんですね。一つは、紫式部の人生がわかるわけです。それから『源氏物語』そのものも書いていますから、昔で言えば、一粒で二度おいしいですけど、本当は三度おいしいんです。紫式部がどうやって『源氏物語』を書いたかというところも書いてますからね。これは谷崎源氏も書



いてない。円地文字も書いてない。田辺聖子さんも書いてない。寂聴さんも書いてない。誰も書いてない。本当これ、世界で初めてかなくなって思ってるんです。誰も読まなくても書いとけばいいなと思えますが、一度読んで三度おもしろいっていう作品は空前絶後でしょう。

で、何が感心したかというと、あの人は行き当たりばったり書いてるんですよ。これは非常に現代的な書き方です。長編作家の場合はびちつと構成を決めて書くのではなく、行き当たりばったりにくしかなんで

す。構成をちよつと決めたのは三島由紀夫ぐらいじゃないでしょうか。私は若いときに、まだ小説を書いてないときに、あれは月刊誌でしたか、池波正太郎と編集者が対談してたんですね。それで月刊誌の連載のところ、ある主人公が街中を歩いていると、後ろからバサツと誰か切りつけてきた人がいるというところ、その号は終わったんです。だから、編集者が池波正太郎に、先生、あの後ろから切りつけた人はいったい誰ですかって言うたら、池波正太郎は、いや、知らないよ、と答えたのです。私は、無責任な作家が世の中にあるなと思って、えらい腹を立てたことがあります。しかし作家はもうそれしかできないんですね。主人公が夜の江戸の街を歩いていると、この辺で後ろから俺を狙ったのがあるんじゃないかなって直感ですよ、作家の。直感で、バサツと後ろからやられる場面を書いたのでしょう。その編集者に、来月号にはわかるだろうと本人が答えたっていうのは、もう絶対そうですよ。紫式部もそうやって書いてます。だから、光源氏が須磨流しになったのも、この辺でちよつと京都を離れてたいなっていうところ。夕顔の遣児の玉鬘が九州に下るのも、うーん、この辺でちよつと大宰府にやって、あとで上京させようと思ったのでしょう。それから宇治十帖も、京都はもう飽きた、宇治あたりには、紫式部自身も訪れたことがありますから、そつちに物語の舞台を移そうという、これも直感でそうしたのです。

言葉を紡ぐ

もう一つは、ある言葉を書きつけると、次の言葉が出てくるというのが作家ですよ。この言葉を書きつけたら次の行はこの言葉になるところを、紫式部はその

まま筆先をたどって小説を書くというやり方をしてます。作家はもうこれしかできない。ちょうど懐中電灯で闇夜を照らして進んでいるようなもんですよ。3、4メートル先は見えます。その先はちよつと、道が曲がっているか、溝があるか、橋がかかっているのかわかりません。ただ、もつと先に進めば、ちよつとほんやりとわかるって、そういう進め方で『源氏物語』を書いている。これは非常に現代的なタッチで書いているっていうところにも感じします。ユルスナールが中世のブルーストだと言ったのはそこでしょうね。意識の流れを追って書いて書く、そこだと思えますよ。行き当たりばったりというか、もう本当に闇の夜の中を書き進めていくようなやり方で、あの五十四帖を書いたのです。

当時の文化・風習

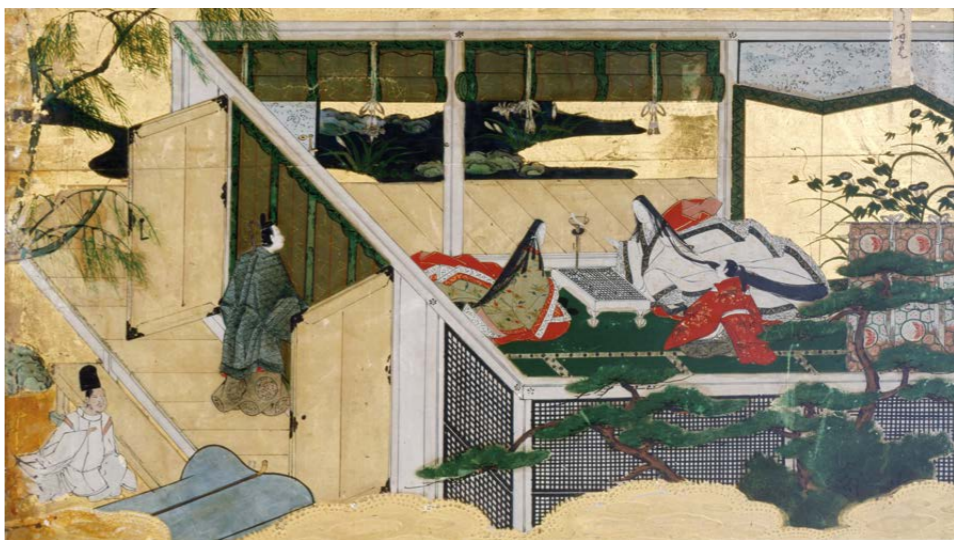
それからもう一つ偉いのは、紫式部は『源氏物語』の中に、当時の風習とか文化を入れるのを忘れていない。単なる観念小説ではなくて、当時の文化とか風習、習慣をきちつと入れている。私は、臨床で主にやってたのはギャンブル依存症ですから、『源氏物語』にもギャンブルがあるかなと思ひ、それからゲーム依存もやってみましたから、調べてみると紫式部はちゃんとその二つを書いています。それで『源氏物語』におけるゲームとギャンブルという(笑)、論文を医学雑誌に書いたことがあります。

ゲームの第一は、何かというときでしよう。碁は4場面ぐらい出てきますかね。碁というのには手による会話だっというのが菅原道真の見方です。手による対話ですから、道真は手談と言っています。最初は空蟬の帖で出てきますが、空蟬と軒端萩が碁の対戦をしてるという場面が出てきますね。それから玉鬘の娘の大君と中君が碁

689年に第1回の禁止令が出ています。もう奈良時代に出てるんですね。それから、2回目は『続日本紀』にあります。あれは孝謙天皇の天平勝宝の6年です。これが754年です。そこに、すごろくというのは、職を失い、親を敬わないし、悪いことをするっていうことが書かれています。鎌倉時代も関東御教書、関東評定事書、鎌倉幕府追加法とかで禁令をすつと出しています。本当に、古い精神科における最高の心の病がギャンブル症なんですよ。今もそのギャンブル症は続いているわけです。

すつとギャンブル症の治療をやってきたので、日本のあつちこつちでギャンブル症というのは大変な問題だということをしやべり続けています。今年になって例の大谷翔平選手の元通訳が捕まりましたからね。「先生よかったですね」ってあつちこつちで言われるんです。「何がよかったですか？これでギャンブル症が有名になったでしょうが。今まで先生があつちこつち行って話をしても、誰も聞かなくて、居眠りばかりしてたのに、よかったですね」というわけです。あ、そうですね、それは本当によかったですね。私も思ひます(笑)。

なぜかというとき、日本のギャンブル症の有病率は2.2%なんです。有病者数は196万人です。大体200万人です。こんな国はないんです。そして、ギャンブル症は周りが苦勞する病気ですよ。ギャンブル症本人の5倍ぐらいの人が、ものすごく苦勞しているのよ、1000万人ぐらいの人が苦しんでいると思ひますよ、ギャンブルによる被害者ですよ。2.2%というとき、この会場に200人ぐらいおられますからね。そうしたら2%とすると、この中の4人か5人はギャンブル症で、5倍の周りの方が苦勞されているということですね。1000万人といえば国民病なんですよ。国民病な



源氏物語図 空蟬 (巻3)
(大分市歴史資料館 所蔵)

をしている場面や、今上帝と薫が碁をしている場面があります。思ひがけないのは、宇治十帖に浮舟が碁の名手として登場するんですね。浮舟は、死に損なって助けられて、尼の生活をした女人です。彼女は自分の内情は語りませんが、絶対しゃべらない。そういう方ですが、碁はうまかつたんですね。しゃべらない代わりに、手による対話、手談はできてた人です。

それから、ギャンブルは何かといえば、すごろくですよ。誰がやっていたかというとき、近江の君です。これは頭中将が若い頃、近江の国の国司の娘さんに産ませた子どもです。光源氏が玉鬘を自分のところに引き取ったことに対抗心を燃やして、捜し出して育てるわけです。近江の君は早口で、すごろくが好きで、その相手を五節の君がやっています。二度そういう場面が出てきます。すごろくというのは、盤を間に置いて、トウの中にさいころを二つ入れて振るんです。目が多いほうがいいわけですが、「常夏」の帖で近江の君はそれを「小賽(しょうさい)」、小賽」といって、相手が振ったときは小さく出る、小さく出るといふような叫び声でしてゐるわけですね。「若菜下」で二度目に出てくるときは、自分が振るときには、「明石尼君、明石尼君」と叫びます。明石尼君というのは、娘さんが明石の君で、その娘さんが明石の中宮ですから、孫娘が中宮になったので、明石尼君というのは、もう大変な幸せ者なんです。だから、「明石尼君、明石尼君」と言つて振るんですね。これはもうギャンブルなんですよ。

ギャンブルの歴史

最初のギャンブル禁止令はいつ出たのか。これは『日本書紀』にあります。『日本書紀』の持統天皇3年、

のに、ギャンブルを国民に煽っているのが政府です。コ罗纳禍で八割の公営ギャンブルがオンライン化しました。そのために若者のギャンブル症が激増しています。えらい脱線しましたね、これは。

最高到達点—宇治十帖

そして結論は、紫式部が最高到達した地点というのは、宇治十帖ですよ。越前に下向したときから、こつこつ書き続けて、あの人の筆先が充実したのが宇治十帖です。だから、あれは完璧な作品になってるんですね。そのために紫式部は何を使用したかについて、心表現を使用したんですね。「心残り」とか、「心細さ」とか、「心憂し」とか、「争い心」とか、心表現は300種ぐらいあります。「争い心」というのは、ドナルド・キーンさんが『源氏物語』には戦争がないと言つた通り、全編にたった一回しか出てきてません。「心細さ」203回。「心憂し」は22回出てきます。ものあわれを下支えするのは、この「心細さ」と「心憂し」なんです。そうした心表現が、宇治十帖の中で開花する。特に心表現がいっぱいなのは「総角」で、「心掎」とか、「心ばえ」とか、「心ざし」とか心表現が全開します。

そういう話を、『源氏物語のこころ』というタイトルで朝日選書から10月に出しますんで、是非、お読みください。ということ、本の宣伝を冒頭にも最後にもし、終わらせていただきます。ありがとうございます。

進化と文明のミスマッチから見た未来社会

総合地球環境学研究所 所長／京都大学名誉教授
公益財団法人ひと・健康・未来研究財団理事 山極 壽一

地球は限界を超えている

皆さん、こんにちは。いや、困りました。「源氏物語の凄さ」にみんな引き込まれてしまって、なかなか抜け出せないんじゃないかって。皆さんを現実の世界におびき出して、そこからさらに700万年ぐらい前に戻ってもらわなくちゃあいけません。

今、世界中の人口は80億を超えましたよね（図1）。赤い線が人口増加曲線です。これ、農耕牧畜が始まった1万年前には500万人しかいなかった。それがこの100年間で4倍になった。『源氏物語』の頃の日本の人口、多分1000万人いなかったと思いますね。それが今、1億2400万人ですよ。とんでもないことが起こっていて、これを大加速の時代といい、都市人口、車の数、通信機器数など、1950年代以降ぐらいいからあらゆる指標が急速に上がり、本当に地球は狭苦しくなりました。もう『源氏物語』の時代は戻ってこない。2009年にプラネタリーバウンダリー（人類が生存できる安全な活動領域とその限界点を定義する概念）という地球の限界を表す指標（図2）が提示され、すでに2、3危機的だったのが、2015年には4つになり、2023年には6つになりました。9つのうちの6つが限界値を超えています。1989年にベルリンの壁が崩

現代は人新世（Anthropocene）の時代

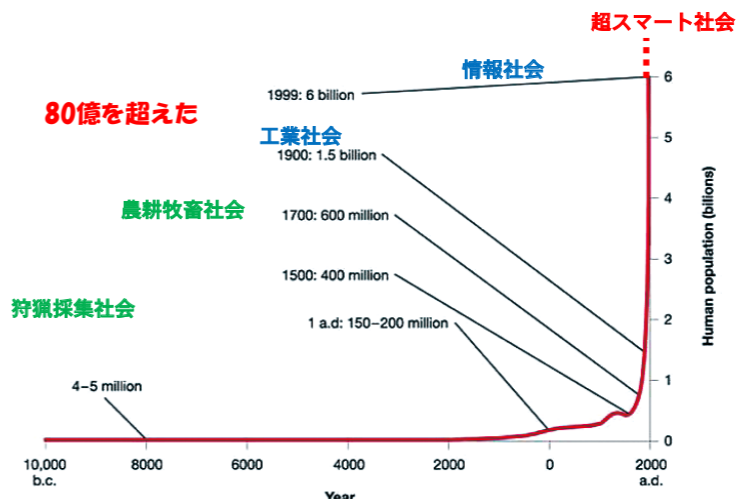


図1

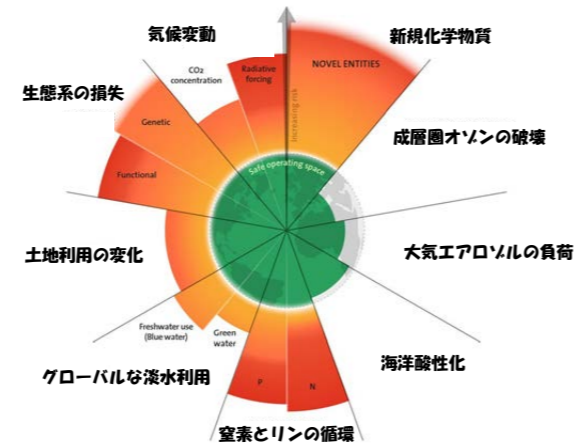


図2



食物を囲んで一緒に食べるチンパンジー

弱みを強みに変える戦略

い。だったら、これまでのやり方ではなく、何か別のやり方をしなくちゃいけない。そこで、人類の進化の歴史を振り返ってみると、700万年前にチンパンジーとの共通祖先から分かれて二足で歩き始め、やがて熱帯雨林という人類の故郷、これはすべての霊長類の故郷でもあるんですが、そこから人類が抜け出していった。直立二足歩行は、森林からサバンナへ行くために役立ったんですね。そして200万年前に脳が大きくなり始めて、人類の祖先は初めて誕生の地アフリカ大陸を出てユーラシア大陸へ進出をした。そして比較的近年、7万年から10万年ぐらい前に言葉が登場して、今度はユーラシア大陸だけでなく、南北のアメリカ、そしてオーストラリアへと進出を果たした。これが進化の歴史なんですよ。

そもそもアフリカの熱帯雨林に人類の祖先が住んでいたのか。類人猿は人間に近い種類で、サルはニホンサルとかですね。2000万年前、アフリカの熱帯雨林には、ほとんど類人猿でしたが、それがどんだんサルの数が多くなって、類人猿の数が減って、今、類人猿は4種類だけで、サルは80種類もいます。だから、類人猿は成功したんじゃないかって、後退していった種類で、その間に人間も含まれます。類人猿はサルに比べ、消化能力と繁殖能力が劣ってたんですね。いろんなものをサルは食べますが、類人猿は熟した果実とか軟らかいものしか食べられないし、数年に一度しか子どもを産めない。サルは、1年おきに子どもを産むので、どんだん子孫を増やせますが、類人猿は一旦数が減ると回復するのにすごい時間

壊して以降、東西冷戦が終結したと思ってたんだけど、毎年のようにいろんな国で内戦が起こっていて、ロシアによるウクライナの軍事侵襲、ハマスとイスラエルの軍事衝突は未だ解決の糸口が見えていない。

人類はどうで間違えたのか

ここでやっぱり人類の進化と文明史を振り返って、どこで間違えたのかを考えなくちゃいけない。人新世って言葉ありますよね。これは1950年代以降、大加速の時代に当てはめられた言葉です。今年になってこの概念は地質学者によって一応否定されましたが、この言い方は間違っていないと私は思っていて、ここに至った考え方は、次の6つがあるんじゃないかって。「人類は進化の勝者である」「言語の獲得による知性の向上」「食料生産による人口の拡大」「産業革命による新たなエネルギーの獲得」「無限の成長を続ける経済システム」そして、「情報革命やグローバル化」。これらはさらに人間に幸福をもたらしてくれると思ってきましたが、これ全部間違いだとしたら、どう世界が見えてくるのか。そもそも、科学技術によって地球のパイを増やして、集団内外の対立を解消してきたのが、人間の歴史ですよ。でも、地球の収容力の限界に直面している今、もうパイは増えな

がかかる。人類の祖先も恐らく絶滅の危機に瀕していたはずで、もともと人類は弱かったんですね。

そもそも二足歩行は欠点だらけ。速力も敏捷力も劣るし、足は地上性になったので掴む能力を失って木に登る能力も落ちました。だけど、その弱みを上回る強みがあつたからこそ、人類は数を増やした。その強みとは、恐らく自由になった手で食料を運んで、安全な場所に隠れる仲間を供給して、みんなで一緒に食べた。これが功を奏したんですね。サルは、食物を分けません。食物を巡って争ったら強いものが独占するのが、サルの社会のルールです。あぶれたサルも困りません。消化能力が強いからいろんなものを食べられるから。でも、類人猿はそうじゃない。強い者が独占せずに、色々なながらもその食物を分けてくれます。チンパンジーやゴリラは、人間と同じように食物を囲んでみんなで一緒に食べる。強い者が食欲を抑制するからこそこ起るわけです。これを人間はさらに拡大しました。人間は気前がよくて、どの文化でも、食物をけちる者は非難されます。人間は、一人で食物を採集しても、それを持ち帰ってみんなで一緒に食べる食事を始めた。その結果、それまでになかった精神性を備えました。見えないものを欲望するっていう能力なんです。見えない世界を紫式部が見事に描いたって言ったんだけど、実は、食物の運搬と分配から始まっているんです。遠くに行った仲間が自分の好きなものを持ち帰ってくれるに違いないという思いを抱く。そういう期待を抱いて待っている仲間がいるという思いがあるからこそ、採集している人は仲間の元に食物を持ってくる。そしてその食物が人と人をつなげるようになる。食事というのは、人間が獲得した多分一番古い文化だと思います。

共同の子育て

もう一つ、弱みを強みに変えた背景は、共同の子育てです。これはゴリラと人間の子どもの成長を調べるとよくわかる。ゴリラは、大人になるとオスは200kg、メスは100kgを超えますが、赤ん坊は1.6kgしかないんです。手の平に乗るぐらい小さいです。お母さんは生後1年間は赤ん坊を腕から放さず、ずっと抱いてる。だから、赤ん坊はほとんど泣かない。赤ちゃんは、3、4年おっぱいを吸って育ちます。ところが人間どうですか。とても大きい、3kg超えることも珍しくない。そして、生まれた直後からよく泣きよく笑う。大きいので、成長して生まれるのかと思ったら大間違いで、自力でお母さんに抱かれなほど弱いし、成長も遅い。でも、離乳だけは早い。1、2年でおっぱいを吸うのをやめる。これ、ゴリラだけじゃなくて、類人猿はみんな人間と違います。

図3の、上に書いてある数字は年齢で、色分けしてある棒グラフは、一生の間に経る成長段階を表しています。乳児期はおっぱいを吸ってる時期、少年期は離乳して大人と同じ硬いものを食べてる時期。赤色の成年期は繁殖してる時期で、ピンク色の老年期は繁殖から引退した時期。人間だけが変な子ども期と青年期があるんですよ。子ども期って何かっていったら、離乳しても大人と同じ硬いものが食べられない時期のことを示します。乳歯なんですよ。オランウータンもゴリラもチンパンジーも、授乳期が長くて、離乳したときに永久歯が生えてる。だから、すぐ大人と同じ硬いものが食べられる。だけど、人間の子どものだけが、乳歯なのにおっぱいを吸えない。永久歯は6歳からしか生えてきません。だから、4年間ぐらいは大人と同じ硬いものが食べられない時期がある

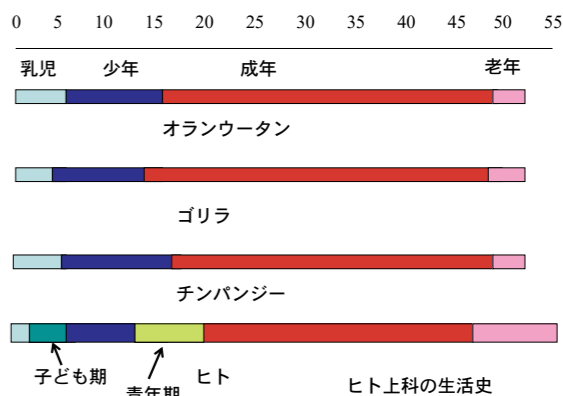


図3

んです。その子どもたちを育てるために、特別なものを運んできてやらなくちゃいけない。そんな時期を何で作っちゃったのか。そして、薄緑色の青年期。これは繁殖能力がついたのに、繁殖をしない時期なんです。何でこんな時期ができたのか。この二つの時期と長い老年期によって、人間の社会は作られたと言っても過言ではない。それはいつなのかでことですよ。何で乳歯のうちに人間の子どものは離乳しちゃうのか。それはサバンナに出ていって、地上性の大型肉食獣に襲われて、たくさん子どもを失ったせいなんです。だから、餌食になる動物と同じように、たくさん子どもを作らなければ生き延びられなかった。そうしなければ絶滅しちゃったでしょう。だから、多産になったんですよ。

人間というのは、1回にたくさん子どもを産めませんから、一産一子ですから、たくさん子どもを産むためには、何回も子どもを産む必要があります。そのためには、出産間隔を縮める必要がある。おっぱいをやってい

さて、人間の脳はゴリラの3倍大きい、それは、人間だけが言葉が話すからだと思っておられると思います。でも、どうもそうじゃない。先ほど言ったように、言葉は、今から7万年前から10万年前ぐらいに現れた。でも、脳が大きくなり始めたのは200万年前なんです。その頃、人間は言葉をしゃべってなかった。じゃあ、現代人並みの脳が達成されるのはいつかかっていうと、現代人じゃありません、その二つ前のホモ・ハイデルベルゲンシスが現代人並みの脳を持っていた。だから、言葉をしゃべり始めたことが脳を大きくしたんじゃないって、脳が大きくなった結果として言葉が登場したっていう考えが正しいんですね。

集団の大きさに比例して脳は大きくなった

じゃあ、なぜ脳が大きくなったのか、それを言葉でしゃべらないサルや類人猿を研究している私たちが調べました。その中でイギリス人のロビン・ダンバーという人が、面白い仮説を発表した。図4のX軸は新皮質比という比率なんです。脳は新皮質と旧皮質に分かれてる。縦軸には、それぞれの種が暮らしている集団の大きさの平均値を取って見た。一つ一つのドットは、サルや類人猿の種の平均値です。そうすると、きれいな右肩上がりになった。ということは、大きな集団で暮らす種ほど、脳が大きくなっていくことがわかった。大きな集団で暮らすということは、つき合う仲間の数が増えたということ、仲間と自分の関係や仲間同士の関係をよく記憶していくほうが有利に生きられるってことでしょうか？そういうふうな、脳は社会脳として記憶量を増やす必要があったってことが推定できた。次に、化石からわかる脳

ると、プロラクチンというホルモンが出て排卵を抑制します。だから、次の子どもが産めない、妊娠できないですね。おっぱいを吸わなくなると、プロラクチンが分泌しなくなると排卵が回復してきます。だから、次の子どもが産める。そのために、子どもを早くにおっぱいから引き離す必要があったんだと思います。それが成功したんですね。

もう一つ、育児をすることによって、人間は音楽的な能力を発達させたという仮説があります。赤ちゃんに語りかける言葉を Infant directed speech というんですが、いくら語りかけても、赤ちゃんは言葉の意味を理解しません、まだ言葉がしゃべれませんから。でも、絶対音感の能力を持って生まれてくるので、その言葉の持つトーンやピッチを聞いて反応してくれています。これはどんな言葉でも共通していて、ピッチが高く、変化の幅が広く、母音が長めに発音されて、繰り返しが多いという特徴を持つてる。こういう声に反応して、音楽的なコミュニケーションだといわれています。そしてその音楽的なコミュニケーションが、お母さんと赤ちゃんだけじゃなくて大人の間を広がって、あたかも母親と赤ん坊の間に生じるような効果を持ったという仮説があります。それは、お互いの壁を乗り越えて一体化しようという気持ちを作った。大人同士の間では一人では乗り越えられない難難辛苦をみんなで協力して乗り越えていこうという精神性、つまり共感、そういうものが高まった。それが人間の社会を強くしたんだという話なんです。

家族と共同体

恐らく、私は、人間の祖先が最初にアフリカ大陸を出てユーラシアへと進出した頃に、家族と複数の家族を含

霊長類の脳化は社会の規模の増大に正の相関をもつ

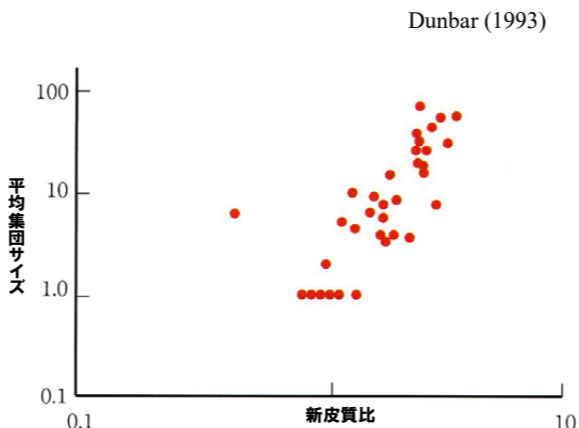


図4

の大きさを推定してみても、この相関係数を使ってその脳の大きさに匹敵する適正な集団サイズを当てはめてみた。面白いことに、人類が進化してきたプロセスの中で達成してきたこの集団の数というのは、現代も残ってるんです。10人から15人、これは人類の脳が大きくなる前、ゴリラの集団の平均サイズですけども、これは何かっていうとスポーツの集団です。スポーツの集団って、試合のときは言葉をしゃべらないでしよう？だから、言葉は原則として要らない。手振り、身振り、目配せ、そういったものでお互いの意図を察知し合っている。これがチームワークですよ。実際、私が調べたゴリラも、言葉をしゃべれないのに群れが一つの生き物のように動ける。人間は、この能力をいまだに保持している。じゃあ、30人から50人はいったい何かっていったら学校のクラス、宗教の布教集団、軍隊の小

悲劇だと思います。



隊、会社で言えば部や課のサイズです。このサイズは、毎日顔を合わせるから顔と性格が一致して、誰かが欠けたらすぐわかるし、誰かが動きだしたらさうじて分裂せずについていける、そういう数なんです。これは、ルールによって決まってるわけじゃない。自然にできる数なんです。そして現代人の脳に匹敵する150人という数がいっぱい何なのかと思ったら、これはソーシャルキャピタル、社会関係資本だと私は思っています。それは、何かトラブルに陥ったり、何か悩みを抱えたときに、相談できる相手の数の上限です。普段は、30人から50人ぐらいで、どんなに増やしても150人を超えないというのがこの数なんです。こういう集団までは、原則として言葉は要らない。ソーシャルキャピタル、社会関係資本は、過去に喜怒哀楽をともにした仲間によって作られる。それは音楽とか、スポーツを一緒にしたとか、共同作業で身体を共鳴して作り上げられる数であって、言葉によって何かを共有したことによってできるものではないんですね。

音楽的コミュニケーション

それを日常生活に落とし込んでみると、共鳴集団ってというのは、家族あるいは親族ですね。それが10〜15組集まって共同体ができ、ここまでは原則として言葉によってつながるわけじゃない。音楽的コミュニケーションでつながると私は言っています。じゃあ、音楽的コミュニケーションって何か。祭りのお囃子、これは土地によって固有のリズム、メロディーがあって、それを聞くと同じように体が動く。これは音楽そのものですか？すぐわかるでしょう？ほかに食事、これもアナログです。その地域固有のメニューを淡々とこなす中で、同じように体を動かしながらリズムに乗れる。服装もそうです。その地域固有の服装がある。あるいはマナーやエチケットや人々のアナログ的な身のこなしというのは地域固有のものであって、そういうことによって人間はつながっている。もっと考えれば、家の調度品や家の造り、街並みそのものも、人々の交流というのを自然の流れに沿って流すようにできてるかもしれない。これまさに音楽そのものじゃないですか？だから音楽的コミュニケーションというわけですね。ここまで、言葉は原則として要らない。その外に意味を伝え合って交渉し商売をするような間柄の人たちがいる。言葉は多分そのために出てきたんじゃないだろうかと思うんですね。『源氏物語』って、やっぱりお互い会う機会が限られていました。だから、言葉によって短歌を通じて本音を言い合い、さまざまな憶測のもとに人間の存在というものを想像しながらつながっていた。だから、言葉の世界というのは今以上に非常に重要だったんじゃないかと思っています。

あったのか。今われわれは言葉を手放せないし、言葉のない世界を想像することができません。それをサルや類人猿が教えてくれます。実は類人猿と人間の間に気がつきました。サルは、対面交渉ができない。なぜならば、相手の顔を見つめると威嚇になるので、強いサルに見つめられたら、視線を避けなきゃいけない。でも、ゴリラは、平静な顔で向かい合える。これができるからこそ、人間は対面交渉を発達させた。つまり、対面交渉は類人猿が共通に持っている特徴であって、これサルと違うんです。じゃあ、何で類人猿は対面交渉をするのか。実は、挨拶とか和解、仲直りなんです。ほかに、遊びや交尾の誘いだったり、いろんな場面で見つめ合い、のぞき込みます。人間も、毎日のように他者と向かい合って暮らしています。でも、ゴリラのように、顔と顔を近づけなくて、少し距離を置きます。何で距離を置くのか？向かい合って何をしてるのかって問われたら、皆さんは、しゃべっているとおっしゃると思います。確かに会話をしますけど、われわれ研究者はあまのじゃくだから、声は聞こえるから、別に対面しなくたっていいですよと思うわけです。でも、会話をするときなぜか1メートルぐらい距離を置いて対面します。これが適切な距離だと思ってる。

目の表情から気持ちを読む

白目があって、白目のおかげで、対面すると相手の目の微細な動きを捉えることができる。そこから人間は相手の気持ちを読むという能力を持っています。それは親に教えられた記憶はないはずだし、学校でも教えてくれません。人間は生まれつきこの能力を持っています。しかも、世界中すべての人間にこの白目があるのは、恐らく古い特徴であって、軟部組織ですから化石に現れないから時代を推定できないけれども、人間のコミュニケーション

近いんじゃないか。人間の心身は、われわれが暮らしている大規模な社会に適応してんじゃないかと、まだ小規模な社会にしか適応してない。言葉は、小規模な社会や文化をつなげる役割を果たしましたが、信頼関係は広がってない。いまだにわれわれの心身は、狩猟採集時代のシェアリングとコモンスの社会にあるんじゃないか。

自己家畜化

農耕牧畜が1万年ぐらい前に始まったんだけど、それによって定住と所有を原則とした社会が始まりました。でも、われわれはまだそれに慣れていない？農耕牧畜はたくさんさんの恩恵をもたらしてくれました。しかし、定住や所有をもたらしただけで、われわれにネガティブなものをもたらした可能性があって、農耕牧畜に慣れていくと同時に、われわれは自分自身を家畜化していったんじゃないかっていう仮説があります。自己家畜化現象、皆さん、家畜のことを思い浮かべてください。繁殖を人間がコントロールし、従順な性質で、人間に逆らわないように育てる。実は、人間自身に対しても同じように行なってきたというのが、自己家畜化の仮説なんです。そして、都市文明は、まさに労働力を駆り集めて、困り込み、それを一定の労働に奉仕させることによって成立させた。最初の農耕文明は、奴隷文明だったといわれています。人を駆り集めなければ、税金になる穀物を大量に栽培し、それを税として徴収することができなかつたからだといわれているわけですね。そして、人が集まることによって、家畜と同じように感染症が蔓延しました。それにいまだにわれわれは苦しめられている。産業革命は、新しいエネルギー源や経済と社会機構をもたらし、国民国家が成立しました。でも、時間を管理

目の表情から気持ちを読む

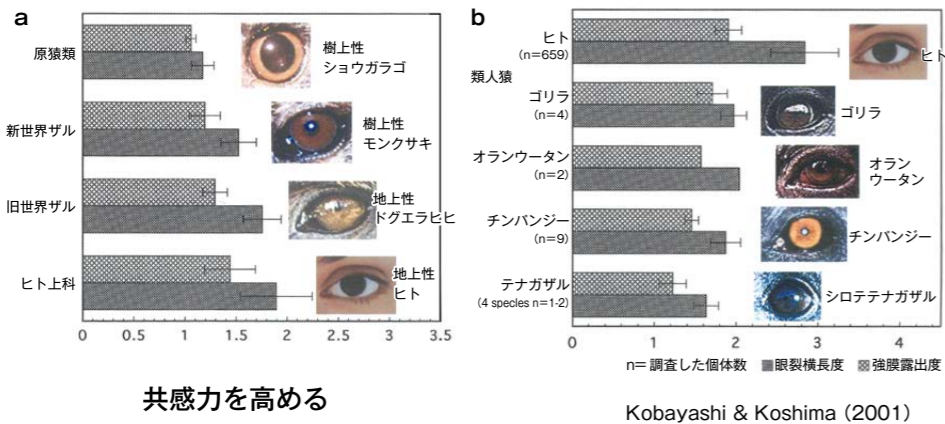


図5

言語以前のコミュニケーション

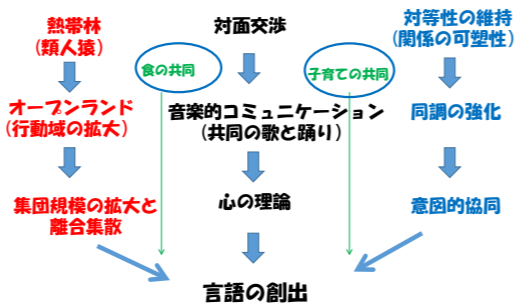


図6

シオンにとって重要なものだと思います。そして、相手の気持ちを確かめるためにあるとしたら、これは共感能力を高めるためにあるとしても過言ではない。恐らく言語以前のコミュニケーションとしては、類人猿と同じ対面交渉から、人類の祖先は出発して、食や子育ての共同を通じて音楽的コミュニケーションを高め、そして相手の気持ちだけではなくて相手の意図を読む「心の理論」といいますが、考えを読む能力を発達させ、言葉の創造につながったんじゃないかと思えます。何せ言葉は重さがないのでどこにでも持ち運びができる。過去に起きた自分が体験できなかったことを伝え合うことができるし、物語を作って、仲間と共有して世界を新たな目で見つめ直すことができます。これが大きかったと思いますね(図6)。

これらの進化の歴史を考慮すると、人間の本质っていったい何だろうか。私は言葉の前に人間の本质ができたと思ってるんです。音楽的コミュニケーションに結びついた身体の共鳴による共感力のほうが、人間の本质に

して生産力を上げることに躍起となり、時間を管理する
とともに人間を管理するようになってしまった。これ
が、今われわれを縛っている大きな制限要因かもしれま
せん。

近代学校制度は、まさにこの国民国家とともに始まる
わけですね。もともと狩猟採集社会由来の学びの仕方と
いうのは、自然の絶え間なく変わる予測不能な条件に持
続的にしかも創造的に適応する能力だったといわれてい
ます。農耕社会が始まると、今度は、実証済みの知識や
方法の正確な再現することに学びが移った。牧畜社会
は、家畜の管理、そしてその責任ですね。そして、近代
学校制度が始まったら、まさに工業化社会や国民国家を
支える人材育成をする制度に変わりました。想像してく
ださい。江戸時代には280くらいあったそれぞれの藩
によって全然教育の仕方が違っていた。でも、明治以
降、すべての学校が同じことを教えなくちゃならなく
なった。それが現代に合わなくなっているってというの
が、不登校児を30万人も抱える日本の現状じゃないかと
思います。そして、今われわれが直面しているのは、通
信情報革命です。文字が5000年前、電話が150年
前、インターネットが40年前に現れ、今SNSの時代
で、常に情報によって動かされる状態になっている。脳
は意識と知能の部分が分かちがたく結びついて判断力を
もたらしています。しかし、現代の科学技術は、知能、
知識の部分を外出しにして情報化し、それをAIによっ
て分析し期待値を出すようになっていきます。でも、意識
や感情は外出しにできませんから、それを発揮する機会
をだんだん失い始めていて、われわれは情緒的社会的性
を失い始めているんじゃないかという気がします。

AIと人間の違いは明確で、AIは身体や意識を持ち
ません。言葉は一旦身体に接地して、身体の五感でそれ



を体系化し、それを再び行為や言葉として発信する。と
ころがAIは身体も意識も持たないので、情報だけを組
み合わせて論理や倫理を作ります。だから、身体や意識
が反映しない可能性がある。その論理や倫理に人間は適
応し、現実の世界で身体や心を使ってやっていたものが
消えてしまう恐れがある。これがAIを用いる上での課
題だと思えます。考え直さなければならぬのは、命と
命のつながりははっきり見据えたうえで、新しい人間の
暮らしを築かなくてはいけない。でも、われわれはAI
によって醸し出されるフィクションの世界にだんだんと
半身を突っ込み始めている。

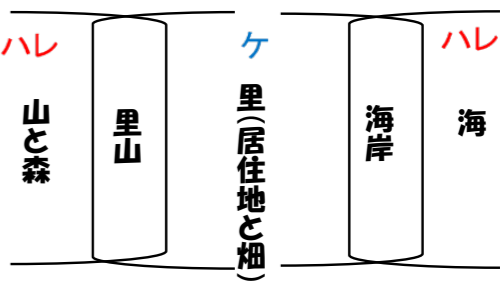
形なきものの形を見、声なきものの声を聞く

実は、関西にコスモス国際賞という賞がありまして、
自然と人間の共生に顕著な貢献をした方を表彰していま
す。私はその委員長をしているんですが、2018年に
受賞されたフランス人の地理学者であるオーギュスタ
ン・ベルクさんの授賞式での演説に感銘を受けました。
「西洋近代の古典的パラダイムは存在論的には二元論に、
論理的には排中律に基づいており、必然的に近代性と工
業化を伴ってきた。このパラダイムは行き詰まりに達し
ている」。これどういうことかっていうと、実は京都大
学が誇る哲学者、山内得立さんが1974年に書いた
『ロコスとレンマ』にある、インド由来の四論に言及し
ているんです。二元論、排中律というのは、肯定か否定
かしかない。でも、東洋には次の二つの論理、どちらで
もない、どちらでもあるというのがあり。このどちらで
もあるという容中律の論理を使って、これからの未来を
切り開いていかなくちやいけなさとベルクさんは言っ
ているんです。実はこの容中律の例は、日本にたくさんあ

れ、同じような文化が世界中に蔓延している、消費文化
ですね。そのことによって、格差は拡大しています。文化
を超えれば価値が違っていたはずなのに、価値が一元化
しちゃった。われわれは、人を信じるのではなくて、制
度やシステムに頼るような契約社会へと移行していま
す。日本で言えば、これまで人と人をつなぎとめてき
た三つの縁（血縁、地縁、社縁）が喪失し、人々は一時
的な縁を求めてお祭りやイベントに殺到しています。だ
かこそ、われわれは今、新たな社交による文化を再構築
しなくちゃいけないんじゃないかと思えます。

じゃあ、社交っていったい何かっていうと、劇作家で
2年前に亡くなられた山崎正和さんは、「人間のあらゆる
欲望を楽天的に充足する、しかしその充足の方法の中
に仕掛けを設け、それによって満足を暴走から守るとい
う試みである」と言っています。そして、「社交とは、行
動の全体をまるで音楽のように一つの緊張感で貫く」。
まさに音楽的コミュニケーションが社交の本質だと言っ
てるんです。その中にわれわれは縁というものを作るこ
とができる。だって、われわれの縁というのは、音楽的
なコミュニケーションで作られているわけですから。ゴ
リラの社会と人間の社会の一番本質的な違いを考えてみ
ると、人間は移動する、集まる、対話するという三つの
自由によって社会を拡大してきたと思います。それがコ
ロナのパンデミックによって、この3年以上、制約を受
けちゃったわけですね。だから、新たにこの三つの自由
を駆使して未来をデザインしなくちゃいけない。

今われわれは、第2のノマド時代、遊動の時代、動け
る時代を迎えた。動くっていうことは、いろんなものを
持って歩けませんから、最初の直立二足歩行の時代に戻
るってことですよ。手で持てるものだけを持って歩く。
そして、今、情報時代ですから、行く先々の情報は全部



るんですね。間とか、見立てという考えです。そもそも
日本人の自然観は、ハレとケの世界の間に一定の場所が
ありました。里山や里海、海岸ですね。そして、そこに
鳥居があって、そこを通るときはみそぎをする。そうい
うことがありました。山の神さんは、田植えの季節にな
ると田に下りてきて田の神さんになって、収穫期にな
るとサルに先導されて山へ帰る。そこで収穫祭をやる。そ
ういう行事が今でも日本にありますよね。そして浦島太
郎がカメの背に乗って竜宮城に行く。川そのものが、あ
の世でもこの世でも、どちらの岸にも属している、ある
いは属していない場所です。そして、そこにかかっている
橋は、どちらの岸の世界でもない、謀をしたり駆け落ち
を打ち合わせたりする場所として考えられてきました。
そして鳥獣戯画、これは12世紀頃に制作された作品です
が、われわれは、サルやウサギやカエルを人間としても
見立てます。だから、これは人間のドラマになるわけ
ですね。

そして盆栽は老木であり、こけしは魂を持つ。文楽と

手に入るの、ものを持っていく必要がありません。も
のをためておく必要もない。だから、狩猟採集時代の
シェアとコモンズ、共有材、それを分かち合えるような
時代がやってくる可能性がある。そうすると、われわれ
を苦しめていた生産性や効率性や技術優先の呪縛から脱
却できるんじゃないか？皆さんが着ている服や皆さんが
持っているもの、これは全部所有によって確保されてま
すが、その価値は誰が決めるかって、マーケットが決
めるわけですよ。われわれ自身が決めるわけじゃな
い。むしろその価値をマーケットから取り戻して、われ
われ自身の使用価値によって世界を作り直すということ
が求められているんじゃないかと思っています。そのた
めには、グローバルなことを第一に考えるのではなく
て、まずはわれわれが住んでる足元から考えていく。つ
まり「Think locally, act globally」という考えが必要に
なるんじゃないかと思っています。東洋の知と西洋の
知を考えたとき、われわれの今の暮らしというのは、西
洋の知が満ちあふれています。ここに東洋の知を入れ込
んで、そして、全体としての関係性や循環性、流れとい
うものを、つまり音楽的コミュニケーションというもの
をもっと大切にしながら暮らしを作り変えなければいけ
ない時期にきているんじゃないかというふうに考えていま
す。科学だけを信じるのではなくて、文化というものを
重要視しながら、二つをうまく融合させていくという考
え方が必要なんじゃないかと思えます。帚木さんがいま
じくも『源氏物語』という世界へわれわれを連れて行っ
てくれましたが、その世界のよさも悪さも認識したうえ
で、いいものをもう一度現代に復活させるといことが
必要なのかなと思っています。どうもご清聴ありがと
うございました。

鼎談

ていだん

鼎談進行 梶中 宗一

梶木 蓬生

山極 壽一

梶中 お二人の話は全く独自のメッセージでしたので、これがどういうふうに絡んでいくのか、短い時間ですが、記憶に残す、記憶を取り戻すというキーワードで、ともに生きるという、何らかの手がかりを導くことができればいいかなと思っております。

梶中 先ほど源氏の世界を女人の哀しさとして語られましたが、平安の社会からすると、千年後の今の社会での、女人の悲しさっていう、そこはどういうふうにお考えですか。

梶木 変わってないんじゃないですか、女人の悲しさというのは。私の担当で編集者のムラタさん、のちのちは出世されましたけど、私の上にポウフラが浮いているように男の無能な連中がいっぱいいますと、それに顔出するのが大変ですというのが、最初の言葉でしたよ。ポウフラとか水草、本当に。ガラスの天井って、当時言われましたが、ポウフラが浮いている。男だけでポウフラになって、水面に浮かんで、何かのさばっているというようなことを聞きましたから、あれはまだ20年ぐらい前の話です。今でもおんなじじゃないでしょうかね。

梶中 同感です。

梶木 『源氏物語』では25人、それぞれの女人の悲しみですけどね。今はもうそれぞれの女性の悲しみっていう

会場 ネガティブ・ケイパビリティは大事な価値観だと思いますし、深い悲しみを体験することで、再会が人間と人間以外ではどう違ってくるのか、教えていただきたい。

梶木 ネガティブ・ケイパビリティっていうのは答えのない事態を耐える力で、究極的には、山極先生が言われた、シンパシーとエンパシーというのがありました。あの底には寛容が必要だっていうのがネガティブ・ケイパビリティですね。寛容さが失われると、シンパシーもエンパシーもない。そして、ネガティブ・ケイパビリティでもう一つ大切なのは、「答えは質問を殺す」というのがあります。これはモリス・ブランショが、答えとは質問の不幸で、答えが与えられると、質問が台無しになってしまう、だから答えはないほうがいいと言ったのです。そしてケアとか、医療では、「正しい説明は凶器になる」とも言えます。あなた、これはこういうことですから、こうですよって正しい答えですけど、それは聞く側の患者さんにとっては凶器になって、ぐさつと傷つき、それでは私が今まで悪かったんだというふうになりますからね。言ってる医療従事者は正しい、これは絶対と思ってます。これが凶器になるのです。うーん、あなたの言うのも一理ありますねというぐらいが、患者さんに対するケアのエンパシーというか、寛容を与えるわけですね。ともかく、さっきの質問に対する答えはないということで、もうご自分で考えてもらいたいというのが私の本音です。

山極 僕の答えは、ゴリラから学んだ、曖昧なことを曖昧なままに信じているってことです。言葉っていうのは曖昧さを許さないし、さまざまな意味を含んでいます。でも、意味が特化してしまう。ゴリラと再会したとき、彼は思い出してくれたって思ったんだけど、言葉がないか

のが、あちこちであるんじゃないでしょうか。チンパンジーとかゴリラには女人の悲しみはないんですかね。

山極 僕らが理解できないような女人の悲しみはあると思いますよ。ゴリラのお母さんって子離れがあっさりして、乳離れをすると、全く母親がもう誰かわからなくなるんですよ。自立してお母さんから離れ、今度はお父さんに行くんですよ。だから乳離れして思春期に至るまでの数年は、お母さんと全くつき合わなくて、お父さんにべったりで、ぞろぞろついて歩く時代があって、それは、母親が楽になるのか、悲しいことに子どもに巣立られるのか、その辺はゴリラにインタビューできないので、わからないです。

梶木 楽しそうにしていますか。

山極 どうなんですかね。ゴリラが一番楽しいときって、おいしいものを食べてるときと、みんなと一緒に休んでるときで、そのときに満足気な声を出すわけ。やっぱりおいしいものを食べると心地いいし、独りぼっちいると何となく不安なんです。見えるところにみんながいて休んでる。でも、ほとんどかかわらない。チンパンジーは毛づくろいしたり、抱き合ったり、お互いかわるのが好きですが、ゴリラは何もせずじっとしてるんです。ともにいる時間が、とても心地いいから、わざわざ自分の子どもやお母さんにかかわらない、一緒にい

ら確かめようがない。ただ、目が輝いて、しかも、子どもの頃とそっくりな行動を示して、わざわざ僕に見せつけるようにしたのは、ここに何かあった。しかし、それ以上、入り込めない。でも、それでいいんだと。それがネガティブ・ケイパビリティと近い話ですね。言葉は何もかもクリアに描き出そうとしてしまう。でも、本当に君、僕を好きなの？嫌いなものって。嫌いだって言われても、本当？って思いますよ。曖昧なものなんです。でも、曖昧なものを、あえて、はっきりさせない。つまり、それが、梶木さんが言った答えないってことですね。そのままにしておいてもいい。でも、そこに曖昧なものを許容する心がないとだめなんです。ゴリラはそれを人間よりも大きく持っている、だから僕らはつき合える。われわれが言葉を持たない動物たちとつき合えるのも、それを持つてるからですね。曖昧なものがある。だけど、人間って、やっぱりゴリラよりは許容力

乏しいんですよ。野生動物、とくにゴリラは私を一人の仲間として受け入れてくれたわけだから、何も彼らのように、私は身体改造したわけでもないし、性質を変えたわけでもないんだけど、やっぱりそのまま受け入れてくれる。それは彼らのほうが、私より、人間よりも曖昧なものを曖昧なままに許容するっていう能力を持ってるからだと思うんですね。われわれは言葉を持ってから、そういうことを失い始めちゃったんじゃないの。言葉で、いろんなことにつけたり、意味をつけないと納得しないようになっちゃった。だから理解することと、わかるってことは違っていて。わかるってことは曖昧なものも含めて了解することですよ。理解するっていうのは何らかのエビデンスや何らかの手がかりを示して理解することですよ。だからわれわれはもうわかり合うということがなかなかできなくなっちゃった。わかり合うためには、相互に曖昧なものを抱えながら許容することだと思っんですけどね。それが

るってだけでいいという。

梶木 紫式部は生き別れ、死に別れ、それからもう一つ、再会というのを非常に力を込めて書いていますが、再会の喜びとかはあるんですか。

山極 再会したシーンを何度か見たことがあって、先、出ていったお母さんが帰ってきたってことがあるんですよ。でも、全く親子の感じじゃない。やっぱり不在は死んだと同じことだと思います。ただ、僕も26年ぶりでゴリラに会ったことがあってね。そのときお互いに記憶がないわけではない。だけど、大仰に親しさを表現しない。一緒にいることを許容するのが歓迎していることで、わざわざ、ああ、帰ってきてよかったなんてやらない。それも一つの落ち着いた共存の仕方だと思っています。そもそも言葉とは相手と離れて、お互いの気持ちを想像しながら交わし合う手段であって、それは共存を目的としていて、むしろお互いに、それ以上、身体的にかかわり合わないこと、つまり言葉が壁を作ったんじゃないかと思うんですね。ちょっと離れていても、自分の意図を伝えることができます。でも、言葉でかわり合うと、逆に厄介だと感じることがある。もっと深く、お互い静かに共存してることができなくなっているような気がしてね。これはやっぱり言葉の使い方を失っているせいじゃないかって、ちょっと言いすぎかもしれないですけど、いや、だから僕は言葉を達者にしゃべるけど、文字を持たない、ピグミーと呼ばれる狩猟採集民の人たちとつき合って、本当にすごいなと思ったのは、近くにいないんだけど、何にもしゃべらない。で、ふっと見ると、ここにいるんです。あれ？いつ来たのって、それだけ許容力が高い。しゃべんなくてもいいんですよ。やっぱり何か言葉って魔物だなんて気がしますね。

やっぱりネガティブ・ケイパビリティとちょっと近い話かなと思っってます。

梶木 ネガティブ・ケイパビリティを取り上げたビヨンは、ネガティブ・ケイパビリティを持つためには記憶もなく、理解もなく、欲望もなくと言ったんですね。もうゴリラの世界ですよ、これは。

梶中 山極先生がおっしゃったことが、まさにともに生きるってことにつながっていくのかなと思っりましたね。先生方、どうもありがとうございます。



2024年7月7日 ヒューリックホール京都

《未来を拓く》

気候変動と生物多様性問題に

システム論と政策科学で挑戦



慶應義塾大学 経済学部 准教授

もりた

かなこ

森田 香菜子

インタビュー 2024年5月27日

聞き手・畠中宗一

(大阪市立大学名誉教授・関西福祉科学大学名誉教授)

今回は、気候変動や生物多様性問題の国際舞台で活躍される森田香菜子氏を慶應義塾大学三田キャンパスに訪ねました。

今、森田さんが関心を持っている研究についてお話いただけますか。

森田 国際関係論をベースに研究しています。国際関係論は政治学、経済学、社会学などいろいろな学問を基にして、国際的な問題に対処する学問で、学際的(学問や研究が、複数の異なる領域にまたがっていること)です。また、社会科学に加えて、自然科学の知識もないと環境問題にいいインパクトを与えられているかは分からないので、社会科学だけでなく自然科学の知識も取り入れながら研究をしています。環境問題の研究分野はと聞かれると、環境ガバナンス(環境問題解決という目標に向かい様々な制度や行為主体が関わり合っていること)とファイナンスですが、その言葉自体がわかりにくいかもしれません。かちつとした法律だけではなく、公式・非公式の両方の制度との関係性や、国だけではなくて企業、金融機関、NGO(非政府組織)などの多様な行為主体との関係性を研究しています。

対象としては特に気候変動問題と生物多様性問題が幅広く関わってくる問題にフォーカスしながら研究してきました。理論から入るといよりは、実務と科学を結びつけるといいますか。大学院生のときに南太平洋の小島嶼(開発途上国であるツバル、フィジー、サモアに行ったのですが、現在の気候変動の原因は先進国にあるのに、先に途上国に深刻な気候変動の影響が出てくる理不尽さを感じました。学部生のときは経済学を勉強していましたが、その後環境分野では、途上国の問題など経済学だけでは解けないような問題がたくさんあることが分かってきました。途上国の問題を解決する上では、環

境だけでなく、倫理や公平性に関わる課題など様々な観点から見ていく必要があります。資金の観点に関心を持ったのはツバルに行ったことがきっかけです。様々な国がツバルの開発支援をしていましたが、それがその国の文化や価値観、政策、いろいろなものに影響を与えているなどと思って。文化や価値観への影響というのは、資金の観点で見ると、例えば、これまで魚を獲たらみんなでお金が入っていた考え方だったのが、外から新しいものやお金が入ってくることでそれを持っている人がうらやましいといった今までなかった感覚が生まれてしまうようになるとなっています。援助の仕方も国によってばらばらで、本当にその途上国にとってよい支援ができていくのか。資金がもたらすよいこと、悪いことの縮図が見えることで、資金の問題に関心を持ちました。

最初は気候変動の影響に対する対応策である適応策の研究が中心でしたが、もともとの原因である温室効果ガスの排出削減策の研究も進めるようになりました。また、さらに研究のスコープを広げる上で自分の中で大きな影響を及ぼしたのが、2010年に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議、COP10です。当時気候変動枠組条約のCOPにはオズバーバーで参加していたのですが、生物多様性条約の方も日本で開催されるなら参加してみたいと思って、当時在籍していた国立環境研究所の上司が環境省に聞いてくれたのです。そうしたら(日本が議長国ということもあり)人手不足だから手伝って、って言うってもらえて。私は当時ポストドク(博士号取得後に期限が限られた研究ポストに就いている研究者)でしたが、20代に生物多様性条約の「生物多様性と気候変動」という議題の国際交渉の担当者として実際の交渉に関わることになりました。また、その後気候変動枠組条約の交渉にも関わることになりました。若い時に2つの条約の国際交渉を経験することができて、大変

ありがたかったです。その当時は、生物多様性と気候変動の関係性はあまり注目されていなかったのですが、ポストドクでもこの役割が回ってきた部分があるのかなと思います。その当時は予想していませんでしたが、今はこの気候変動対策と生物多様性保全策との相乗効果の議論も高まっており、民間セクターにおいても非常に重要な課題となっており、その重要になる課題に早く関わったことはよかったです。国際交渉だけでなく、途上国の現地調査としては、小島嶼開発途上国やベトナムの気候変動への適応策の調査に加えて、ラオスやカンボジアといった途上国の熱帯林に関わる調査にも参加させていただきました。そのような国際交渉と途上国の現場を見ながら環境ガバナンスやファイナンス研究をしている中で、今度はIPCC(気候変動に関する政府間パネル)という国際的な科学的アセスメントの報告書(第6次評価報告書)で、投資のファイナンスの章の主執筆者に選出され、各国の執筆者と共に報告書の執筆に取り組みしました。現在は、IPCCに加えて、生物多様性の国際的な科学的アセスメントであるIPBES(生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム)の社会変革アセスメントの主執筆者も務めており、これまでの気候変動と生物多様性に関する国際交渉への参加を合わせると、気候変動と生物多様性の政策と科学の四つのプロセスに関わってきました。世界でもあまりそういう人はいないかもしれないなと思っていて、今は気候変動と生物多様性の両方にまたがる課題を知っている人、ということでも国際的な議論に呼んでいただいています。

すんなり今の分野の研究者になれたわけではなくて

いや、あまりにもいっぱいキーワードが出てきて、オーバー

ヒートしそうです。でも、オーソドックスに学部、大学院を出て研究者になっていくパターンがあるとすると、それはちょっと違ったかたちで道を切り開いていらっしゃる感じがしますね。

森田 そうですね。きれいな言い方をすれば、いろいろな分野で幅広く研究してきたと言えますが、すんなり今の分野の研究者になれたわけではなくて。高校生のときは理系クラスにいて、大学の理系学部への進学を目指そうと頑張っていました。特に物理と数学の点が伸びず、大学受験ぎりぎり前に文系に変更したのです。本当は理系に進みたかったのについていうのがあったのですが。今度は学部で経済学を中心に勉強することになった。ミクロ経済学ではひたすら数式が出てきて、これで大学院に進むのはちょっときついなと思い始めました(笑)。でも、ちょっと遠回りをしながらいったぶん、それが結構プラスになっていて、そのとき苦しんだ経済学や金融論の勉強が今になってすごく役に立っています。その後は、私の世代はみんな同じように苦労していましたが、なかなか自分の研究分野での安定したポストが見つからなくて。国立環境研究所と慶應義塾大学で任期付きポストに就いた後、森林総合研究所で任期のないパーマネントポストをいただきました。森林分野の自然科学中心の研究で、国際関係論の研究者のキャリアとしては少し遠回りしたかもしれませんが、その分生物多様性などの自然に関する問題について他の社会学者にはない知識が身についたので、それはそれでよかったと思っています。

もともと理系を志向されたのは、何かご自身の思いがあったのですか。

森田 「環境」分野の研究というと、なんとなく理系のイメージがありました。ただ、父(森田恒幸氏・元国立環境研究所領域長)は工学系の出身でしたが、環境経

研究分野を通じて、 発見があったり、つながれるって 個人的にはとてもうれしいこと

あらためて、父親である森田恒幸氏の影響について、森田さんはどういふふうに認識されていますか。

森田 父は気候変動の分野で国際・国内でよく知られていた人だったので、気候変動分野で森田という父であり、私は父の子どもで、香菜子さん、と呼んでくださることも多いです。父は私が大学4年生のときに亡くなってしまったので、研究の内容を議論するほどまでにならないままでしたが、亡くなったあとに、父と一緒に仕事をしていて国内外の研究者の方々からいろいろ教わりながらきたところがあります。

私が所属していた森林総合研究所は、父とあまり関係がないかと思いましたが、退職直前に過去の活動を知る方に資料をいただき、1989〜1990年に国立環境研究所と森林総合研究所の社会科学分野の研究者数名によって組織された「森林環境資源研究会」というのが開催されていることを知りました。その中で父が国際機関では環境会計が話題になっていることを伝えたり、この研究会での活動のコーディネートを積極的にしたりしていたことを知りました。今でも過去の父の研究や活動から新しい発見があります。自分の父親ではありませんが、短い期間で本当に多くのことをやったのだなとすごいなと思いつつながら文献を読んでいます。父が書いていた内容は今読んでも全然古くないのです。このアイデアも使えるなというのいろいろあって(笑)。

父は環境経済学、統合評価モデルなどを活用した研究をしていたので、私は父とは違う方向に進んでいると思っていました。大学院時代の留学先やIPCCの

経済等を軸に研究しており、「環境」だから理系ってことはないよ、文系でも『環境』は大事になっているよ」みたいなことを教えてもらって。また、父にもまずは理系をしっかり勉強した方が良いと言われていて、でも高校3年生になって、文系の方が合うと思うと言われて、大学受験はそんなに文系・理系を簡単に変えられないので、もっと早い段階に言ってほしかったとも思いましたけれど(笑)。

問いを立てることが大事

父がいろいろなことをよく知っている方であったから、適切なアドバイ스가あったでしょうね。

森田 父には大学卒業後、さらにもっと先で役に立つことをたくさん教えてもらっていた気がします。今ようやく意味がわかるようになってきたのは、大学受験の前に成績が伸び悩んでいた時に、「問題を解くことよりも、問いを立てることの方がもっと難しくて大事なことだよ、そんなことでよくよしないで、もっと世界を見なさい」と言われたことです。まずは大学に受からないと研究者を目指すスタートラインにもつけないので、その時の私には目の前の問題が解けるようになることが大事で、何を言ってるんだらうと思っていました。研究者になってみたら、本当に大事な問題は何かを自分で考えることが重要で、その問題設定が難しいので、今はとても良いアドバイスをもらったと思っています。

話が重なるかもしれませんが、今、話された研究に関心を持たれたきっかけみたいなものは何ですか。

森田 小さい頃から環境分野の研究者がよく家に来ていました。私はつくばで育ち、同級生の多くの親がどこかの国の研究機関の研究者でした。環境ファイナンスに興

会合でも国際関係論が専門の先生方からも父の話を聞いたりして、父は実は国際関係論の方向での研究の可能性も生前探っていたことが分かりました。父をなかなか超えられませんが、プレッシャーにはなっておらず、私はそういった家庭に生まれ、せっかくなので多くの資料もあるので、そこをうまく使って何かやれないかなと思っただけです。そういう研究分野を通じて発見があったり、父とつながれることは個人的にはとてもうれしいことだと感じています。

現場を見ながら 科学と実務の両方を勉強していく

大学での「森田香菜子研究会」について、少し説明してください。

森田 まだ4月にできたばかりで、学部3年生が13人、ツバルやフィジーなどへ既に行ったことがある学生もいて、フットワークの軽い、熱心な学生が来てくれます。自分が解きたい問題を設定してもらって、その問題を解決するために国際関係論を軸としながらいろいろな学問分野のアプローチから学際的に取り組んでもらいたいと思っています。研究会の活動としては、環境ガバナンスに関わる本の輪読から、実際に企業や行政などの実務に関わる方々から取り組んでいることの話や聞いたり、いろいろな現場を見ながら、科学と実務の両方を勉強したりしていくというスタイルです。例えば、バンダラデシュでのソーシャルビジネスも行っている企業の話や聞いた、ソーラーシェアリングに取り組んでいる企業の現場を見に行ったり。

学生さんも、相当勉強されるんでしょうね。



味を持ったきっかけはツバルなどの小島嶼開発途上国に行ったことですが、将来の就職先として研究者がイメージできていたのは、特殊なつくばという地域で育ったからというのがありますね。小学生の時にもう研究者になりたいと言っていました。父は私が子供の時から環境に関する本を、もっと大きくなってからは例えば『沈黙の春』(レイチェル・カーソン著)を読んでもみたら?と買って渡してくれたり、また幼いころ住んでいたオーストラリアなど国内外の自然が豊かなところに連れていってくれたり、小さいころから身近にこの環境問題があったというのはあります。

森田 サステナブルなまちづくり、サステナブルファイナンスですとか、エネルギー問題、DX(デジタルトランスフォーメーション…デジタル技術を活用して、これまでの様々な問題を解決することなど)ですとか、学生は自分でどんどん調べたりしていますね。テーマが広いので指導の大変さはありますが、私が学生に教えてもらっていることも多いです。学生が今どのようなニュースがあるか教えてくれたり、現地調査へ行くところを見つけてきてくれたりとか。20代の人たちの調べる力や方法は違いますが、発信方法も、SNSを使った方がいいですよとか言われて(笑)、私も勉強になっています。

三つの主要なシステムを 変えなきゃいけない

学際的なアプローチがわかっている方にとっては、何となくイメージがつきやすくて、古典的なやり方で学問をやっている方々にとっては、ようわからんというイメージもあるんじゃないかと思うんですね。その辺をわかるように説明していただくと助かります。

森田 持続可能な開発も、気候変動も生物多様性も、目標を達成する上では大きな社会のシステムの変革が求められています。すなわち、例えば、社会1技術システム、社会1生態システム、社会1制度システム、このよくな主要な社会システムを変えなければいけません。例えば、気候変動の緩和策であれば、エネルギー、交通などのシステムを変える「社会1技術システム」、生物多様性保全であれば、農林水産業などが関わる「社会1生態システム」の変革が必要です。IPCCやIPBESという、国際的な科学的アセスメントに参加して感じたのは、欧米の研究者はシステムのいろいろなものを見て考えるトレーニングをしていることです。しかし、日

本の教育も政策に関する議論も結構各論が多いと思います。個々の技術開発の話だったり、個々の事例の話で終わったり。日本が、技術はあるけれど国力がどうなのか、と言われている一つの要因としては、この各論の議論になりがちで、システムの見ながら政策・制度設計ができていないことがあるのではないかなと思っています。

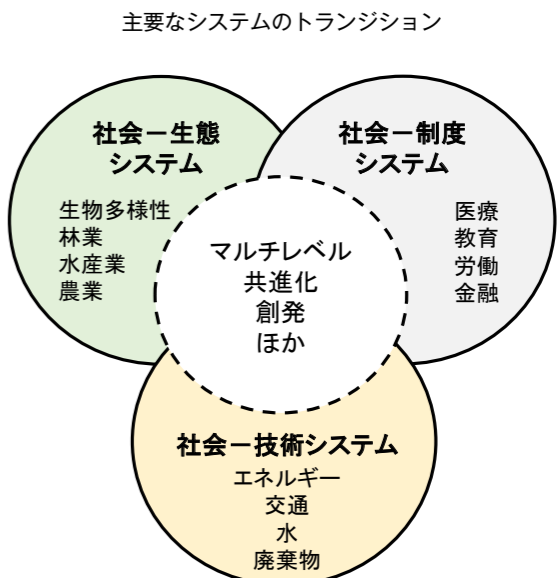
社会システムを変える上では、様々なレベル（国際・国家・地方のレベル）、様々なセクター（エネルギー、交通、農林水産業他）における制度や行為主体との関係性を考えながら、この複雑なシステムをどう変えていくかを考えていく必要があります。この数年で一気に金融機関や企業における気候変動や生物多様性の取り組みが加速していますが、これまであまり環境に取り組んでいなかった行為主体と新たな連携を探るなど、思わぬ組み合わせで進められないかと考えています。

今、欧州などで議論が高まっている分野の一つに、環境とデジタルに関するトランジション（移行）の両立があります。現在、持続可能な開発、気候変動、生物多様性などでカギとなっているのがトランジションとトランスフォーメーション（変革）です。定義は様々ですが、今の制度を、例えば気候変動等の目標に向けてそのまま移行させていくことをトランジションで、トランスフォーメーションは今のシステムを抜本的に変えるぐらいの大きな変革を指していると理解しています。気候変動や生物多様性の目標達成にはそういう移行や変革がないとできない。こういった学問をもっと丁寧に説明することができたらいなと思います。研究会では、このような大きな概念について勉強しつつも、具体的な自治体の事例などを見ながら持続可能な社会づくりはどうしたらいいか、そして自治体などだけではできないので、国の政策として、どういう取り組みが必要かなどを議論しています。

森田 日本語で「ファイナンス」の訳が統一されておらず、「金融」と訳したり、「資金」と訳したり、ちょっと分かりづらい部分があります。

財政って訳したりね。

森田 そうなんです。資金の観点でいうと、国際環境条約には、グローバルな問題を解決するうえで途上国にも



(出所) Loorbach, D. et al. 2017. Annual Review of Environment and Resources 42:599-626 を基に森田氏が作成

全体像が描けていない

そういう大きな社会変革みたいなものへの気づきは、大企業では意外とありますよね。例えばトヨタであったら、能登半島の地震でトイレを開発してるとか。

森田 そうですね。ただ、日本の大企業も国際会議で見るとやっぱり各論というか、全体像が描けていないのが現状で、国際的な政策的議論の場でも、例えば、日本は脱炭素に関して、この企業ではこんなことやってますと言った話も多く、全体のビジョンが世界に伝わっていないように思います。例えば、欧州で作られた「欧州グリーンディール（※）」のように、気候変動に加えて、生物多様性など環境に取り組むために社会経済に関わる

参画してもらった必要があるんで、先ほども触れたとおり、まず途上国の対策を支援するためのお金という意味での「ファイナンス」があります。

この途上国の対策の支援は、主に1970年代以降に設立された様々な国際環境条約の中でも重要な要素で、気候変動、生物多様性などの様々な環境条約の中でも途上国対策推進のための効果的な資金メカニズムの議論が行われてきました。しかし、気候変動に関するパリ協定やSDGs（持続可能な開発目標）が採択された2015年を境に環境に関するファイナンスの議論も変わってきました。パリ協定では、「世界全体の平均気温の上昇を産業革命以前と比べて2℃よりも十分低く保ち、1.5℃に抑える努力をする」という1.5℃目標が掲げられたと同時に気候目標を達成する上で、「温室効果ガスについて低排出型であり、気候に対して強靭な発展に向けた方針に資金の流れを適合させること」という、現在の官民の資金の流れを気候目標に向けていくことが求められています。

そういった中で、先ほどお話ししたもう一つの側面である金融システムと経済のグリーン化の話が高まりました。国際環境条約とは別の金融セクターの議論の中で、金融システムがこのまま気候変動などの環境がもたらす様々なリスクに対して対応しないので活動し続けていくと、最終的には金融システムが不安定になってしまうことを懸念して、今この議論が高まっています。企業や金融機関にとっての気候変動のリスクとは物理的な影響を見るリスクと、移行リスクというものがあります。物理的なリスクとは、気候変動による洪水などの災害や海面上昇などの影響により、例えばその企業のインフラが遮断されていくようなリスクがあることです。もう一つは移行リスクで、例えばパリ協定もでき、脱炭素に対しての厳しい政策や基準を各国が課していく中で、企業もそれに備えていないと、サプライチェーン（原料調達に始

行為主体がこういう方向に向かうんだという大きな絵も必要になっており、こういったビジョンを作る上では日本の政策決定者だけでなく、アカデミアも弱いところがあると思います。

※欧州グリーンディール・クリーンで循環型の経済に移行することで資源の効率的な利用を増やすとともに、気候変動を食い止める生物多様性の損失を回復させ、汚染を減らすための取り組みを盛り込んだ行程表。特に運輸、エネルギー、農業、建物など経済の全ての分野と、鉄鋼、セメント、繊維および化学などの産業を網羅している。

森田さんが、その領域でバイオニア的なグランドデザインを作っていくわけですね。

森田 できれば、そういうふうになりたいなと思っています。国連の会議では、日本人の存在感が落ちているという場面が結構あります。議論にかかると、大きな絵を描く議論を理解し、そこにインプットしていきける人ではないと難しい。環境に関わるファイナンスの話であっても、国際的には途上国の対策を進めるためのファイナンスと、金融システムと経済をグリーン化する議論の中のファイナンスの両方を一緒に議論しているものの、日本では国内の対策を進めるための特定の金融商品の話に焦点が置かれたりと、各論の議論になりがちです。だからできるだけ様々な分野の国際的な議論の場に出るようになって、国際的にはこのような議論がされているので、日本でも議論が必要なのではないかなどと提言しています。どの分野でも、全体を包括して見れる人材は必要ですので、学生にもできればそういう人になってほしい、そういう人材も増えてきてほしいなと思います。

そういうグランドデザインが私自身もまだきちんと見えてない古いタイプなんですけど、気候変動や金融というキーワードがどういうふうにつながっているのかなと思っています。森田さんの中の具体的なイメージを教えてください。

まり、製造、在庫管理、物流、販売等を通じて、消費者の手元に届くまでの一連の流れ）の中で、あなたの企業の製品は気候変動に配慮していない製品なので取引しません、と言われてしまう。お金を出している側である金融機関にとっても、その企業がだめになってしまおうと投資したお金が無駄になってしまおう。金融機関と企業の双方が気候変動など環境問題に対応してないと、もうビジネスも成り立たなくなるという危機感で、今取り組みが加速しています。

われわれの領域から見たら、金融というのは特殊な概念で、ファイナンスって言われる方がまだしっくりくるところがあります。多分、やっぱり学際であれば、言葉の使い方、ファイナンスをどう訳したかとか、言葉が異分野によってどういうインパクトを与えるか、そこまで配慮しないと、誤解をします。

森田 「持続可能な開発」も、昔の文献では「持続可能な発展」と訳されているのに、どこかで「開発」と訳されたために、何か途上国だけの問題みたいなイメージになってしまったのがすごく残念です。IPCCでは「サステナブルディベロップメント（持続可能な開発）」という言葉がたくさん出てくるのですが、そこでは途上国の話だけではなくて先進国の話もしているので、やっぱりこの訳はどうかと思います。言葉はすごく大事で、「ファイナンス」も金融の方々が環境分野に入ってきた今、どの意味を指しているのか整理が必要ですね。

機関誌（第34号）で、環境と福祉をキーワードにして座談会をしたんです。そのときの参加者で済生会理事長の炭谷さんは、厚生省と環境省に所属されていた方なので、環境と福祉の両方わかっていらっしゃるのですが、やっぱり行政は縦割り、環境分野に厚生省は全然関心を持たないとか。だから実際に一番必要なのは省庁の連携じゃないかなと思います。

森田 そうですね。父の時代、京都議定書（※）の議論

のころは、気候変動分野における環境庁と通商産業省の対立が大きく、今でこそ省庁や民間セクターは気候変動対策などに関して基本的にはもうやらなければいけないこととして取り組み始めていますが、その時代はまだまだそういう考え方はなかった。父も含めて気候変動に関する研究者も様々なステークホルダー（利害関係者）の対立に巻き込まれる部分もあり大変だったそうです。国内の政策的議論の中に身を置きすぎると様々な省庁や国内のステークホルダーに左右されてしまい、自分の軸を見失いがちなので、国際的な学術・政策的議論の場に身を置きながら、日本に足りない課題を伝え、国内政策にも取り組むやり方で行きたいと思っています。

※京都議定書・1997年に京都で開催された気候変動枠組条約第3回締約国会議、COP3において採択された先進国等の温室効果ガス排出削減約束等を定めた議定書。

知らないことは知らない と素直に言う

教員として、学生に指導されていくうえで意識していることは何ですか。

森田 今、学部の方で英語のみで学べるプログラムもあることもあり、英語でサステナビリティ論という授業を行っています。できるだけ学生には、何が問題か、どうやって解決できるかを自分で一生懸命考えてほしいので、その材料をいろいろ渡している状況です。私自身も、まだそんなに経験が豊富ではなく、過去の環境に関する議論を調べれば知らなかったこともたくさん出てくるので、学生と一緒に勉強している感じで、教えているという感じではないかもしれないですね。なので、自分が知らないことは知らないと素直に言うようにしていて、

とももつと関心を持ってもらう、議論するということ
が重要だと思います。

環境問題は われわれが生きていることのベース

次の世代へのメッセージを載けますか。

森田 社会システムの改革が必要とお伝えしましたが、これから本当にいろいろな問題が絡み合い複雑化していくと思います。環境問題はわれわれが生きていることのベースとなっていて、みんなにしっかり知ってもらい、勉強してもらいたい。あと、過去の知見もしっかり使っていくこと。過去の知見を効率的に学ぶ上では上の世代の人たちのサポートも必要だと思います。私は過去10〜20年ぐらいのことは知っていますが、環境についての議論の始まり、原点のところはよくわからない。その世代がまだざりざりいる今、世代間でしっかりと知識を受け渡すことが必要だと思っています。それをベースにしながら、新しいことを考えていくことが大事です。最近懸念しているのは、一から議論し始めようとしてしまうことです。SDGsが始まったところ、同世代も含めていろいろな分野の方々とSDGsの取り組みについて議論していたら、上の世代の方に、全く同じ議論を92年のリオ・サミットの時代に聞いたと言われて。私たちの世代や新しくこの分野に取り組みだした方々だけで話していると、一から議論してしまうので、ベースとなる知識は上の世代の力も借りながら学び、そしてこれまで解決できなかったことは、過去のいろいろな失敗を踏まえたうえで、若い世代に新しい発想で考えてほしい。そこに私の世代も全力で応援したいと考えています。

学生と一緒に考えてほしいと言っています。そして、日本の議論と国際的な議論ではギャップもあるので、できるだけ日本語だけではなく英語で書いてある文献も読んでねとも言っています。

学生さんは先生の英語の講義についていける学生ということですね。

森田 ついてきてくれる学生はついてきてくれます（笑）。環境に関わる分野も、様々な条約がありますが、それに加えて金融、貿易など分野は多岐にわたるので、一人ですべての分野の最先端を勉強していくのは無理があります。なので、研究会などでは、学生が担当した分野に対しては、「あなたがその分野のエキスパートなので、その分野についてはみんなに教えてください」と言っています。それぞれがいろいろな分野で調べていけば、研究会全体としてもいろいろな学びにつながります。私の大学院時代の留学先での指導教員であったオランダ・ヤング先生（環境ガバナンス研究の第一人者）は、いつも学生に対して、「学生からはいつも学びがある」、「この分野はあなたの専門なだから」と言ってくれました。日本の教育は、先生が「教えてあげる」、「黙って聞きなさい」みたいなところがあると感じていたので、こんなに偉い先生がそういうふうに行っていることに私はすごいことだなと思っていました。先生のレベルではないですが、私もできるだけそういうふうに行っていたらいいなと思っています。

問題の解決のために、われわれ一般の国民が心がける、やれることは、具体的にあります。

森田 それは難しい質問です。いろいろな行為主体がみんな同じ環境目標に向かって同じ方向に進んでいくというのはもちろんとても大事です。後は問題を自分事とすることも重要です。例えば、都部に住んでいる人は、

あとは、グローバルな視点が必要で、例えば、途上国に調査やボランティアで行くなど、何かチャンスがあればぜひ行ってほしいと思っており、若い人たちにチャンスが回る仕組みにしたいと思っています。日本ではアカデミアでも政策的な議論でも重要な意思決定の場に若い世代があまり入っていない一方で、国際会議に出ると、海外では若い人でもいろいろなことを任されているなど感じます。私はありがたいことに最初の国際交渉は20代でさせてもらいましたが、20代は体力があって、徹夜もまだ平気でできて（笑）、じっくり勉強する時間もありました。だから早い段階で若い子に学ぶチャンスを与えてほしいと思っています。

ありがとうございました。

インタビューを終えて

森田香菜子氏は、気候変動と生物多様性問題に国際関係論をベースに学際的な研究を志向する。しかも、環境問題は、解決が急がれることもあって、政策科学として展開せざるを得ない。IPCCやIPBESの主執筆者として活躍されている。親子二代で環境問題に取り組むエネルギーを感じることができた。つくばで育ったという特殊な環境も氏の研究者アイデンティティに影響しているように思えた。わが国が、各論からシステムとして理解する枠組みを獲得することや、共に学ぶという姿勢での教育に、共感を覚えた。

（畠中宗一）

温室効果ガスの排出に大きく関わっていることはイメージできますが、生物多様性に関してはあまり関係ある問題だということが理解しづらい部分があります。ただ、モノやサービスの流れまで見ると都市部の人たちは実は多くの生物多様性に悪影響を与えている部分があります。モノやサービスの流れをさらに広く見ると、我々には日本国内だけでなく、途上国の気候変動や生物多様性などの問題にも大きく関わっています。各自ができる環境対策を進めることも重要ですが、我々の生活や経済活動が自分の住んでいる外の環境問題にも関わっていること、途上国などにも影響を及ぼしていることなどを教える教育も必要です。それに取り組む政策や制度を後押しするようなことも重要です。そういった観点も含めて、一般の方々に環境対策に関する説明なども行っていますし、教育に関しては、これからの社会を担う子供向けの気候変動に関する絵本の監修もしています。子供たちにはSDGsや気候変動がだいたい知られるようになってきたので、次世代の教育がまずは大事だと思います。また政策や制度の後押しについては、環境に配慮した製品の購入などの自分ができることに加えて、環境政策や制度、社会システムの変革にも関心を持ってもらいたいです。欧州では市民が参加しながら気候変動の目標達成のために社会を変える、気候市民会議が活発に行われてきていますが、日本でも気候市民会議が広がりつつあるので、ぜひ市民が社会の変革に貢献できる場が増えるといいです。

日本を見ると関心は自己に向いていて、社会とかそういうまなざしが本心に弱いですね。

森田 そうですね。海外からきている学生は、早い段階から広く環境のことも勉強しているのか、結構、政策的議論の鋭いところを突っ込んできます。日本でも早い段階で、若い時から、身近な問題だけではなく、政策のこ

森田 香菜子

Kanako Morita

PROFILE



慶應義塾大学経済学部准教授、国連大学サステイナビリティ高等研究所客員准教授。国立環境研究所特別研究員、慶應義塾大学特任講師、森林総合研究所主任研究員などを経て現職。東京工業大学大学院博士課程修了。博士（学術）。専門は国際関係論、環境政策。気候変動や生物多様性分野などに関するガバナンスやファイナンスについて研究。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第6次評価報告書主執筆者、生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム（IPBES）社会変革アセスメントの主執筆者を務める。

「風景の未来」

風景は誰のものか — 京都の桜、紅葉と三山の松 —

京都工芸繊維大学名誉教授

小野芳朗

風景の未来を語るにあたって、本稿では明るい未来の風景像を想像するだけではない。近代にいかにも風景は変わってきたのか、あるいは壊されてきたのか、誰によつて、何のために変えられてきたのかを知る事で未来への示唆を考えていきたい。ここでは風景は、観光という行為、土地の私有化という行為、都市計画事業、そして地球温暖化の影響をうけるとした。何を守るか、何が有効かを京都に例をとり「風景の未来」を考える助けとしたい。

昭和47年（1972）、スイスに本部を置く民間のシンクタンク、ローマクラブの『成長の限界』が世界的に注目されました。そこに書かれた未来がどうなったのかを検証しなければいけません。答えがないことはともかく、予想よりひどくなったものもあります。この報告書の最後に、環境に重要な影響を与えない活動（教育、芸術、宗教、スポーツ、基礎科学）は無限に成長を続けるだろうと書かれています。つまり人間の社会は、いろいろと変化するけども、文化というものは変わらない。このことを風景についていえば、植生含め変わるだろうけれど、風景にまつわる文化は変わらないだろうと思うのです。

昭和45年（1970）の万博開催前夜、小松左京（作



© 中嶋悠一朗

家）さん、梅棹忠夫（文化人類学者）さん、加藤秀俊（社会学者）さん等が「貝くう会」、「万国博覧会を考える会」を結成し、これが「未来学会」につながっていくのですが、小松さんは当時を、「日本全体が若くておもしろかった。官僚的な管理が社会の隅々まで行き渡り、万事無難でこせこせした今の世の中とは違って風通しがよかった。面白い人材もたくさんいた。個人の利害や金もうけや立身出世なんて考えないで、知的好奇心の赴くまま日本をどうするのか、未来をどう切り開いていくのかを語り合った」と話されています。小松さんは、昭和47年に『日本沈没』という小説を書き、映画にもなりました。パニック映画のようにみられますが、日本人は国土のない時代をどう生きる？というのが最後のテーマになっていました。梅棹さんも実は「人類の未来」という本を書こうとしましたが、未完に終わっています。ご本人は理由を語っておられませんが、未来は暗いので描けなかったと言われています。「未来学会」では、現代の解決できていない問題を考えて、そこから未来を見通すとしていきますので、これに倣い、そもそも風景というのがどう変化してきたのかという原因を見ることで、その未来を考えてみたいと思います。

観光による経済財化

易経（古代中国の書）によると観光とは観国之光、その国の光を見ることだといわれています。写真は、岩倉具視の『米欧回覧実記』の最初のページです。その例言に、「目撃ノ實際ヲ録ス、耳目ノ談ヲ以テ、眉目ヲ粧ハス」とあります。観光とは単に遊覧じゃない、その国のいいところ、光っているところを日本に導入することだということです。岩倉たちが政府一行と3年間も、ヨ

ロッパやアメリカを旅したのはまさしくその国の光を見に行つたということです。



出典元：久米 邦武 編、田中 彰 校注
『特命全権大使 米欧回覧実記 1』
(岩波書店・8頁に掲載)

では、桜の風景を考えてみましょう。桜といえますと入学式や入社式、新年度の始まりというイメージですね。最近では桜の季節に海外からの観光客が多く、その風景を楽しんでいたようです。それでは、この桜の原風景というものは何なのでしょう。私は、原風景とは記憶につながるものだと思っております。記憶につながるものは、人々に共有された文化だと言ってもいいかもしれません。逆に、これは操作も可能だということになります。素性法師（平安時代の歌人・僧侶）の詠んだ古今和歌集の歌に、「見渡せば柳桜をこき交せて都ぞ春の錦なりける」とあります。これは京都のどこだろうと探しまし。鴨川の荒神橋あたりにソメイヨシノとヤナギが交雑されておりありますが、ソメイヨシノは平安時代にはありませんでした。ヤマザクラとヤナギの群生した状況でしょうか。いや、ヤナギは水辺だし、ヤマザクラは山にあるので、もしかしたら「こき交せて」とは法師の想像上の春の風景かもしれないと考えられます。



© 高野友美

「松の葉色も春めきて嵐も浮かぶ花の波桜川にも着きにけり」。謡曲『桜川』のシーンです。あたかも花いかなだのようですが、実は山に花が咲いていて、嵐のような風によつてざわざわとしている風景のことを言っています。桜は風の音にも散ることを怯えるようにみえる。こういう歌から生まれた景色が、記憶として残っています。ヤマザクラは、葉と花が同時に出来ます。ソメイヨシノは花だけです。これはエドヒガンとオオシマザクラの交種だということがわかっていて、水際を好みます。クローン種なので、接ぎ木が増えていき、花は春に一斉に咲いて一斉に散るのが特徴です。京都で最初にソメイヨシノが植えられたのは、20世紀になってからの明治37年（1904）です。岡崎の動物園の南側の土手に植えられました。川沿いや疏水沿いに水道の導水管が敷設され、その線状敷地に植樹していったのです。その結果、写真のような風景ができ、観光客はこれを目当てに来ます。サトザクラやシダレザクラは、平安神宮などに植えられて、山にはヤマザクラ、平地の水辺にはソメイヨシノが線状に植えられて、見事な景観を保っています。



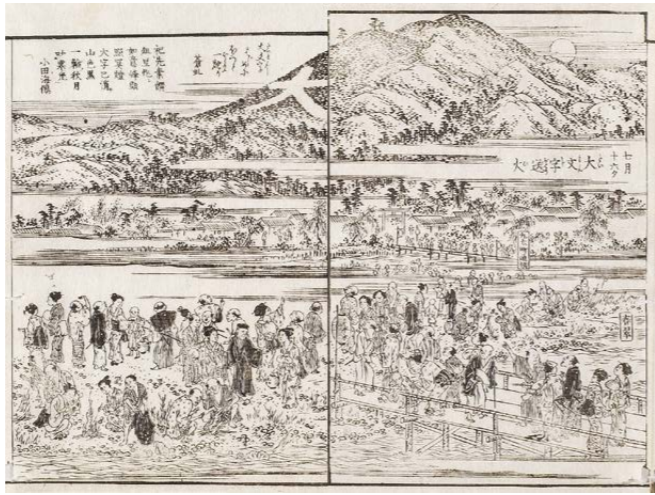
出典元：小野芳朗『風景の近代史』（思文閣出版、2023年）

で、大阪の営林局が植林を始めます。施業といいますが、隣の嵯峨野も荒れていましたので、北垣知事は自分の別荘を提供し、それが現在の祇王寺です。やがて新橋芸者が住むようになり、きれいな方で、大変な評判となります。嵐山、嵯峨野という女性に隠棲するイメージになる。失恋した女性が一人で訪ねるといような物語が出てくるわけです。

いずれにしろ、荒廃した嵐山は昭和8年(1933)の嵐山風致林施業計画によって、アカマツの緑の背景にヤマザクラが植えられました。これは後嵯峨上皇が吉野から数百株の桜を移し、植えさせたという伝承に基づいたこととです。京都の市内ですが、昭和40年代(1965~74)になりますと、ソメイヨシノで町中が満たされます。そこで方針が転換して今度はモミジを嵐山に植え、秋の観光客に来てもらおうとします。その後、昭和57年(1982)、元京大の先生が、いや、やっぱり桜やなっていることを委員会と言うのです。委員は全部自分の教え子なので、桜への転換で決まります。平成22年(2010)になりますと、春はヤマザクラ、秋はモミジにして、両方、観光客に来てもらおうという方針になります。つまり、観光によって京都、そして嵐山の風景は変わりました。

土地の私有化

近代の風景の悩ましいところで、いわゆる入会(いりあい)という共有の山林、河川が消滅していくことによって、風景が変わっていきます。実は、幕末までの所有という概念は、現在と違います。近世の大名含む領主たちは、自らの領地の統治権、つまり年貢の徴収権と警察権、司法権を持っていました。百姓は、田畑を所有し



花洛名勝図会 東山之部 四「大文字送り火」
(国際日本文化研究センター所蔵)

和の燃料革命で薪を取らなくなり、その結果、山が富栄養化します。栄養が多いとアカマツは成長しませんが、ここに、昭和40年(1965~74)代に松くい虫がやってきて、アカマツは全滅、そこに成長するマツタケもなくなりしました。

二つ目は紅葉です。気温が低下しますとクロロフィルが破壊され緑色が消え、アントシアニンで赤くなるか、カロチノイドが残って黄色く見えます。ところが、温暖化が秋のモミジの色づかせないという状況が起こっています。1980年代以降、カエデが紅葉する日が遅くなっていて、約50年間で16日、紅葉が遅れるという気象庁のデータがあります。事実、平成14年(2002)は紅葉していたのが、平成17年(2005)は紅葉しない枯れたような感じになりました。

三つ目、桜の開花時期が変わる、あるいは桜の木その

でいて耕作してしまいました。最近ではコモンズという用語ですが、極めて同族的、宗教的、同業的共同組織というのが存在していて、年貢は個人で払うのではなく、村請制で、村みんなで責任を持つというやり方です。作柄に応じて、11月になると奉行(代官)が免定、要するに確定申告をします。そして12月某日までに納める。庄屋、年寄、惣百姓、他村からの手伝いの者まで含めて、みんなで請け負うのが当時のやり方です。

ところが、廃藩置県で領主の統治権が奪われ、上知令で神社仏閣の土地も全部取られ、それを民間に払い下げて現金化するということが起こります。そうすると、自分の土地を持つ、つまり私有化が始まります。そして、地価に応じて税金を金納することになります。地租改正です。共同で管理していた入会地は管理する者のない土地として基本、国に接収されてしまいます。私有化された土地は、私のもので、売買も勝手、何を植えても勝手だということ、風景は激変するきっかけを得ます。

土地の分断化

さらに、都市計画や国土計画による土地の分断が起きました。新都市計画法(法律第100号)が昭和43年(1968)にでき、その第3条に「国及び地方公共団体は、都市の整備、開発その他都市計画の適切な遂行に努めなければならない」、そして住民はそれに協力しなければならぬとあります。戦前の都市計画は、市町村が主体でしたが、戦後は国が入ってきます。その結果としての空間は、鉄とガラスとコンクリートの都市、自動車が目立つ道路、人為と都合で物語を採用する「作られた風景」など、様々な問題が出てきました。都市だけでなく、土地の周縁についても司馬遼太郎さんが昭和55

ものがなくなると予想されています。温暖化しますと、桜が咲かなくなる可能性があります。京都では大体4月上旬、最近では、3月の下旬よりも早い年があります。それから、休眠打破といって冬が寒くないと、桜は咲かない、あるいは開花が遅れるのです。休眠打破が遅れると北のほうでは寒いので先に咲いて、南のほうはなかなか咲かない、桜前線が逆向する可能性があります。また最近の話題ですが、桜の木を食べるクビアカツヤ

カミキリ(特定外来生物)の幼虫がかなり増えています。京都府はチラシを作成し協力を呼び掛けています。木の内部を食い荒らして枯らすので、結局桜を伐採することになります。現在、近畿圏に広がっていて、京都府でも木に侵入する可能性があります(令和6年(2024)7月京都府内で発見)。場合によっては、桜の風景や春の記憶が消えてしまうかもしれません。吉野の千本桜も現在、戦々恐々という状況だそうです。

観光、土地の私有化、都市計画、地球温暖化というのは、風景を劇的に変える可能性があるということがわかってきました。再び、ローマクラブの「文化活動は無限に成長を続ける」ということに対して、Gino氏は、こういいます。「私たちは適応していかなきゃしょうが

年(1980)に山林が宅地化してしまうのは、価値がなかった山や海浜、河川敷、入会があったところに価値を与え、そこに工場、道路、新幹線、ダム、港湾建設等をすすめる、と批判しており、これが田中角栄首相の日本列島改造論の一個の本質になります。ただ、大平正芳内閣では、こうした流れを止め、田園都市国家構想、人間と自然との調和、人と人とのふれあいができる、距離の近い社会を作ろうと方針転換を図りますが、残念ながら大平首相の急死により、日の目を見ませんでした。

地球温暖化

地球温暖化の影響はこれから大きくなると思います。令和5年(2023)9月に、スイス連邦工科大学のChristophe Girod(名譽教授(景観学))が来日し、大変なことが起こっている、温暖化によりアルプスの氷河が溶け始めていると発表されました。氷河が溶けると湖に水が溜まらないので、水力発電ができない。そして飲料水が枯渇するだろうという警鐘を鳴らしています。日本には氷河はないから関係ないのかというと、そんなことはありません。風景に甚大な影響を及ぼすでしょう。一つはアカマツ、松枯れです。現在、世界的に松枯れが広がっています。これはマツノマダラカミキリが運んでくるネマトーダ、線虫によって枯れていくのです。京都の三山は全部アカマツだったのです。それがほぼ全滅しました。

図は幕末の大文字送り火の風景です。山のでっぺんにしょぼしょぼと生えているのがアカマツです。ふもとにもしょぼしょぼと生えています。先ほどの話のように、明治期に乱伐され、禿山化しています。明治30年(1897)に森林法によって何とか守ろうとしますが、松よりも広葉樹のほうに成長は早いのです。さらに、昭

ないが、一番大事なのは、自然に対して人間はどういう姿勢で、どういう行動や感覚を持って認識しているのか。われわれはどういう美的感覚を持って理解し、それをどうやって再生するのか。要するに自然に対する向き合い方というもの、つまり風景にまつわる文化ですね。これを日本人は豊富に持っている。そうした文化というのは残し、継承していかなければならないということだと思っております。

風景を継承してきた百人衆

ここで、アカマツをひとつの文化に採用してきた洛北の京都市左京区松ヶ崎についてお話しします。かつては愛宕郡松ヶ崎村といました。その住民の先祖は、伝承によると、松ヶ崎百人衆といい、桓武天皇が奈良から連れてきた100人の優秀な百姓たちであるといわれています。実際、明治初期の「村誌」(村から京都府に届けた現況記録)で確認したところ、明治初期までは百人衆が保たれています。この百人衆が松ヶ崎村の妙と法の送り火を点火しています。百家を保つために、一家が一人に世襲させること。つまり、一人を残し、あとは全員出ていきます。分家はしない、田んぼを分けないということ。す。もともと、一人一町(三千坪)の田んぼと、一山を与えられ、禁裏を含め皇室関係の領地を耕してきた。禁裏百姓といえます。禁裏料、法皇料、あるいは公家の九条家御料、それから門跡や長橋局など家臣の土地で、そうした皇室関係の土地を耕していた人たちです。公称1185石を耕し、このうち四割を毎年、年貢として御所などに馬に載せて納めていました。また、西山と東山の妙法の山で採取した間伐材や枝など燃料や、肥料としての下草、あるいはマツタケを採る場所が各家で決めら

引用元: 京都府 HP

れていました。

この人たちが歴史に記録として登場するのは中世です。松ヶ崎のあたりは、もともと比叡山の領地でしたが、徳治元年（1306）7月16日に、日像上人の説法によって470名余の村民全てが日蓮宗に改宗します。この200年後、天文元年（1532）に幕府が、山科の本願寺にいた一向一揆が京都市中に押しかけてきまなので、その防衛に比叡山山門と日蓮宗をたきつけます。こののち、京都の町衆はほぼ日蓮宗となるのです。こののち、幕府に地子銭、いわゆる固定資産税を払わないという一揆を起こします。頭にきた幕府は、今度は比叡山に日蓮宗を撃退しろとたきつける。天文五年（1536）の天文法華の乱です。比叡山は松ヶ崎東山の山頂東北側にある松ヶ崎城を攻め落したことを皮切りに、京の都に建立の日蓮宗寺院、洛中二十一ヶ寺本山を焼き討ちしますが、その道筋にあった松ヶ崎村も焼き討ちします。敗けた日蓮宗は逆賊です。「今般日蓮党、京都に充滿し、悪逆を致す事、言語道断の次第」ということで、全員洛中から堺へ追い出され、11年後勅諭により和解して戻って来るのです。松ヶ崎村の村人は北方の岩倉長谷村に避難、妙泉寺の再興は40年後、天正3年（1575）のことでした。日蓮宗にとっては、この「法難」により、村の結束がさらに固まったと、いまだに松ヶ崎の方は言います。彼らの生業は米作と、それから野菜ですが、市中に下肥をくみに行き、代わりに野菜を置きます。山はアカマツの山なのでマツタケを採り、間伐材は燃料、下草は草肥としていました。ただ、昭和40年代（1965〜75）以降、下草を取らなくなりましたので富栄養化してしまい、だんだん松くい虫で枯れてしまい、約50年前に松がほぼ消えてしまったのは前記の通りです。

この百人衆は、現在、公益財団法人松ヶ崎立正会（平成25年（2013）10月に財団法人から移行。大正6年（1922）創設の立正会を継ぐ）を結成し、妙法の送り火と題目踊・さし踊の保存継承、古文書の保存・活用等を行っています。送り火は、徳治元年（1306）7月、日像上人が松ヶ崎西山に杖で、妙の字を画いたことが始まりとされています。また、題目踊は全村民改宗に喜んだ住職実眼僧都が自ら太鼓を叩いて踊ったことに始まったもので日本最古ともいわれる盆踊りです。併せて、この題目踊を後水尾上皇が承応年間（1652〜55）、行幸し、妙泉寺で高覧されています。天覧の盆踊りともいわれています。

では、百人衆の土地がどうなっているのか、というと、法の字山では、各家が所有する山の土地は山頂から麓へと縦に区切ってあります。大体各家が平等になるように持っています。法の字山の各家の土地の一部は近年、立正会との譲渡契約により立正会所有となり、その他の土地は従来からの立正会との賃貸借契約により、立正会賃借となっています。妙の字山には、京都市上下水道局の配水池の敷地があり、昭和初期に一部京都市に接収されています。妙の字山は、明治22年（1889）頃までは村が共有、管理しており、今は立正会が所有しています。要は山の所有権又は使用権を持っていないと、送り火である「妙」「法」の字が点火できなくなるので、ある意味、村（＝松ヶ崎立正会）の共同管理地、入会（いりあい）です。

ただ、百人衆だった100戸の家は、現在71世帯です。相続問題が非常に悩ましい。つまり、一人の子どもが全部継ぐというのは今、なかなかできません。権利を主張されると分割相続しなきゃいけない。こうやって故郷の景観が変わっていく、伝承の継承とアイデンティティが

16日の点火は立正会役員が点火合図、火床現場管理を担います。危ないということもありますが、点火は譲れない。それが伝統を伴う文化だといえましょう。

それ草木
心なしとは申せども 花実の時を違えず
陽春の徳を備へて 南枝 花 始めて開く

これは謡曲『高砂』の詞章です。草木、植物には心はないと思われているけれども、花を咲かせ、実をつけるときは決まっている、時を知っている。だから心を持っているのだと教えています。私はここで文化、文化と言いましたが、草木にも心があり、それに感応する人の営

みを鑑みると、50年の時を超えても、松を植えるという壮大な作業の意味もわかるなと思っております。

左下の写真は法の字の山の上から南を見た風景です。山は京都市民の景観であります。市中からずつと見渡すのが三山の風景だと「京都の文化的景観」では言っておりますけれど、これは逆から見た風景です。松ヶ崎の人たちは1300年、山から京都を見下ろしてきました。そして松を植え、下草を刈り、お盆になるとお精霊さんを送る火を灯し、題目踊を踊った。こういう風景もあるのです。

簡単なまとめですが、気候変動などの変化に植生は対応できません。また植生変化は何十年も時間がかかります。人間生活は適応できたとしても、風景によって醸成されてきた文化と、それを育んだ共同体（コモンズ）は

なくなってしまう。その中で、半世紀程前から、送り火点火の作業は、辞退・退去する各家に変わって、親戚筋、地域に根付いた住民有志、更には地域奉仕団体が引き継いで務めています。換言すれば京都市登録無形民俗文化財（昭和58年（1983））でもあるこの伝統行事により形成されてきた郷土文化に如何に対峙するのか、苦慮の様相も伺えるが、生活環境の変化を踏まえた次世代への着実な伝承に向けて、不易流行の視座、多角的視野を以って奮闘されることに期待したいと思います。

アカマツの再生

京都市三山森林景観再生ガイドラインが平成23年（2011）に出来ました。それはアカマツ林を再生し、マツタケの山を再生するという高い目標を掲げ、アカマツは京都の景観の重要な要素であるとしています。これに対応し、昨年度、京都府が森林文化を保全する補助金を出したのです。送り火は宗教行事であり、文化そのものです。京都三山にあった松の木は松ヤニを含み、火床で非常に燃えやすい。これも送り火成立の背景となっています。その松は今、業者から購入しているそうです。

松の木の割木そのものは8月15日又は16日の午前中に、71世帯の家族とひとつの地元奉仕団体（まっちゃんきネットワークの担当会員）がそれぞれの火床へ運んでいきます。このアカマツ林を再生しようということで、令和5年度（2023）の補助金を申請され、職人さんの指導の下、3月に松の苗木を植えました。私も微力ながら手伝いました。私たちが植えた松の木が送り火の割り木になるのは50年後：今の関係者はもう誰もいないということですね。三山のアカマツの林はなくなりましてけど、アカマツの林に戻すのだという心意気があります。

簡単には成立しません。文化として何を守るべきか。変わらないものは何か。考えてみましょう。（本稿の松ヶ崎に関する記述では、公益財団法人松ヶ崎立正会理事長・岩崎勉理事長のご教示を受けた。深甚の謝意を表します。）

◎岩本馨



◎小野芳朗



◎小野芳朗



法の字の山からの風景
◎小野芳朗（許可を得て撮影）

PROFILE



小野 芳朗
Yoshiro Ono

- 1982 京大工学研究科修士・同助手、1992 博士号取得、1994 同講師
- 1996 岡山大学環境工学部環境デザイン工学科助教授、2002 同教授
- 2008 京都工芸繊維大学教授
- 2018 京都工芸繊維大学理事・副学長
- 2023 同大学名誉教授
- 国立民族学博物館、京大人文科学研究共同研究員、国立環境研究所客員研究員、統計数理研究所客員教授、能楽金剛流師範
- 吉田光邦編「一九世紀日本の情報と社会変動」思文閣出版、1985年
- 吉田光邦編「万国博覧会の研究」思文閣出版、1986年
- 京大大学人文科学研究「近代京都研究」思文閣出版、2008年
- 京大大学人文科学研究「近代京都研究」思文閣出版、2013年
- 小野芳朗「清潔の近代」講談社新書メチエ、1997年
- 小野芳朗「水の環境史」PHP 新書、2001年
- 小野芳朗「調と都市」臨川書店、2010年
- 小野芳朗ら「大名庭園の近代」思文閣出版、2018年
- 小野芳朗・岩本馨「食がデザインする都市空間」昭和堂、2019年
- 小野芳朗ら「図説大名庭園の近代」思文閣出版、2021年
- 小野芳朗編「<妄想>する未来」昭和堂、2022年
- 小野芳朗「風景の近代史」思文閣出版、2023年

2025年度 研究助成の募集

募集分野



ひとの健やかで心豊かな未来を実現する研究
若い研究者による意欲的な研究を助成します
採用実績のある方の再チャレンジもお待ちしています

電子申請システムの運用を開始します

募集
期間

2025年 **4月1日** ~ **4月30日**

- **研究助成金**
1件につき20万円～100万円（2024年度 16件採用）
- **研究期間**
2025年9月～2026年8月末までの1年間（研究期間は原則1年間とします）
- **応募資格**
日本国内において上記テーマに関する研究を行う人
- **選考**
2025年6月下旬、選考委員会にて採用者を決定します。
- **助成金交付**
2025年8月より交付します。
※営利目的の研究には助成できません。
※個人への交付はできません。団体・組織に限ります。

2025年度より応募方法が郵送から「電子申請」へと変わります。
詳しい内容は、財団ホームページでご確認ください。
(<https://www.jnhf.or.jp>)

2024年度 研究助成採用結果

分野	氏名	所属	研究課題
食品	藤掛 伸宏	国立精神・神経医療研究センター 疾病研究第四部	認知症モデルショウジョウバエに対するスパイスの治療効果の検討
	豊田 淳	茨城大学 学術研究院 応用生物学野	心理社会的ストレスを緩和する機能性食品の開発に関する基礎研究
環境	佐々木俊介	早稲田大学 平山邦夫記念 ボランティアセンター	未利用魚の可能性：健康な食と持続的な資源管理に向けた効果的な利用法の検討
	埴淵 知哉	京都大学大学院 文学研究科	健康的な地域の食景観とは？ — 「食の砂漠」論の地理学的拡張
	稲井 智義	北海道教育大学 旭川校	比江島重孝「かつば小僧」における民話採集と自然環境の意義
医学	神谷 正樹	国立長寿医療研究センター リハビリテーション科部	認知症者の家族介護者に対するピアサポートの場の提供による健康関連 QOL の変化 - 音声分析を用いた感情推定に関する検討 -
	松本 圭一	広島市立大学大学院 情報科学研究科	画一的な認知症画像診断の普及に向けた基礎研究
	白水 雅子	京都光華女子大学短期大学部 歯科衛生学科	子どもの窒息予防のための食支援プログラムの開発
	佐伯龍之介	京都大学大学院 医学研究科	大規模ヒトコホートにおけるクローン性造血のマルチオミックス解析
	町谷 充洋	国立がん研究センター研究所 がん幹細胞研究分野	哺乳類 RNA 依存性 RNA ポリメラーゼが標的とする新規遺伝子の同定
	伊藤 将	大阪大学 蛋白質研究所	卵細胞の品質管理機構の解明と早期卵巣不全の治療応用に向けた実験モデルの確立
福祉	南 聡	大阪大学大学院 医学系研究科	脂肪毒性によるオートファジー停滞と細胞老化に着目した糖尿病関連腎臓病の病態解明と治療応用
	村上 隆亮	京都大学 医学部附属病院	膵β細胞量の見える化と予防医学への展開
	東根 ちよ	大阪公立大学大学院 現代システム科学研究科	地域福祉実践をめぐる「地域」像の協働的創出プログラムの開発 - 郊外部における「対話の場」を通じた地域マインドマップ作成を核として -
	山中 司	立命館大学 生命科学部	アバター間コミュニケーションと生成 AI といった先端技術を活用した、コロナ禍で顕現した多様な生徒の悩みに対応可能な保健室の実現
	宮本 恭子	島根大学 法文学部	ヤングケアラーの孤立・孤独を防ぐための「ゆるやかなつながりの仕組み」の創出

助成件数 : **16件**
助成金総額 : **1,300万円**

ひと・健康・未来研究財団は、
熱意あふれる研究者を
これからも応援してまいります。

ひと・健康・未来 インフォメーション

『ひと・健康・未来シンポジウム』のご案内

第31回 ひと・健康・未来シンポジウム 2025 京都

『人とのつながりを大切にする医療～緩和医療・サイコオンコロジー～』

第31回ひと・健康・未来シンポジウム2025京都

人とのつながりを大切にする医療

～緩和医療・サイコオンコロジー～

2025年
1月11日(土) 13時00分～16時00分
ヒューリックホール京都 京都府中京区東山町東山1丁目10-2
参加無料

つながりを通して自分のできる！
からだの心の痛みを緩和ケア

生きたい、そう思うようになるまで

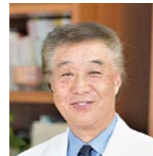
サイコオンコロジーと家族・遺族ケア

総合討論

企画/コーディネーター 中井 吉英

講演者
蓮尾 英明
阿南 里恵
松岡 弘道

主催 公益財団法人ひと・健康・未来研究財団



企画/コーディネーター
中井 吉英



蓮尾 英明



阿南 里恵



松岡 弘道

私たちが会場の皆様と一緒に考えます

新しくなった財団のホームページから簡単に申込みいただけます。

財団ホームページ
<https://jnhf.or.jp>



学びの深化を愉しむ



コラム 第1回 未来研究会

未来研究会は、役員対象の研究会である。2024年5月までに59回が、実施されている。これは、理事会のメンバーが、自己の専門領域や関心に合わせて、最先端の講師を推薦する。自然科学から人文・社会科学の多様な分野で活躍する講師の話をお聞きいただくから、贅沢この上ない。私は、これまで第26回の稲垣栄洋氏「弱者の戦略—雑草は踏まれても諦めない」(機関誌14号)、第29回の斎藤環氏「『対話』から『健康生成』へ」(17号)、第39回の澁谷智子氏「ヤングケアラーへの支援とケアを受ける親への配慮」(23号)、第46回の倉恒弘彦氏「疲労研究の最新の動向」(29号)、第56回の村上靖彦氏「ケアからつくる社会」(36号)を推薦してきた。推薦した講師が、その後、活躍されていたり、キーワードが社会的に認知されるのを見ると、推薦冥利に尽きる。私以外でも、それぞれの専門分野から最先端の講師が推薦される。それは、分野を問わず刺激である。そのような学びの場が、未来研究会で保障されている。私のように自己の専門以外に対しても関心があれば、学ぶところは大きい。また専門外であっても質問することで、異分野が身近なものになる。もちろん自己の専門領域以外に関心を持てるかどうかには、個人差がある。私の蔵書は、専門分野よりそれ以外の分野の図書が圧倒的に多い。そのような読書をあえて行って来た。それは、新たな講師を推薦するためであったり、スペシャルインタビューのためであったり、さらには企画のためである。そのようなメンタリティが、私の読書の傾向を

一定程度方向づけている。自己の専門分野だけであれば、専門性を深めることはできるが、他の専門性については全く分からないということが起こる。様々な領域に違和感なく近づき、その最先端の知識や議論を身に付けていく。そのことが、学際性を謳う財団の強みにも繋がる。私は、未来研究会に参加することで、自己の守備範囲を拡大し、さらには学びを深化させることができる。その意味では、誠に贅沢な研究会である。財団の役員であることの最大のメリットは、未来研究会に参加できることだと思っている。それだけでもったいないので、機関誌にその内容が掲載される。この研究会があることで、役員専門以外の視野が拡大され、学びの深化にも繋がる。さらに付け加えれば、講師の講演後、質疑が行われ、テーマによっては、それぞれの関心からの問いが、新たな学びに発展することもある。対話の場が、お互いを知る機会にもなるので、それはそれで楽しい。日本全体の学びの場が、疲弊している。しかし、未来研究会の場は、皆が自由に発言できることもあり、学びを深化させる貴重な場でもある。



畠中 宗一
Munekazu Hatanaka

公益財団法人ひと・健康・未来研究財団 理事
大阪市立大学名誉教授/関西福祉科学大学名誉教授

1951年鹿児島市生まれ。鹿児島大学・立教大学大学院・筑波大学大学院を経て、沖縄キリスト教短期大学・中国短期大学・東洋大学短期大学・大阪市立大学・関西福祉科学大学を経て、2024年3月に退職。機関誌第6号から編集後記を、第8号からスペシャルインタビューを担当。

vol. 38
2024. 11
編集後記

機関誌第38号をお届けします。

特集「記憶に残し、未来を拓く—共に生きるために—」は、私の企画で2024年7月7日にヒューリックホール京都においてハイブリットで開催されたものです。記憶をキーワードにして、帯木蓬生氏が「源氏物語の妻さ」を、山極壽一氏が「進化と文明のミスマッチから見た未来社会」を講演し、その後、私も入って鼎談を行った。お互いのスタンスの違いを了解しながら対話を続ける。そこに共に生きるためのヒントがあるのでは。

未来研究会の報告は、2024年5月17日に開催された小野芳朗氏の「風景の未来」です。風景が、さまざまな要因によって変化する。他方、風景によって醸成された文化やそれを育んだ共同体の成立には時間がかかる。それらをどのように守るかという問題意識が新鮮であった。

スペシャルインタビューは、森田香菜子氏です。気候変動や生物多様性問題にシステム論と政策科学で挑戦しつつ、国際舞台で活躍する氏に新たな息吹のようなものを感じた。コラムは、塩田理事長の後を受けて、私が担当します。

本号も財団の未来社会に対する羅針盤的役割が如何なく発揮されているように思う。多くの読者が、この機関誌から刺激を受けて欲しい。

編集委員長 理事 畠中 宗一